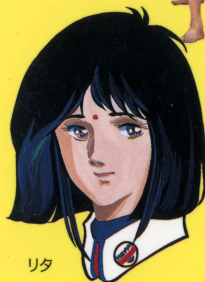
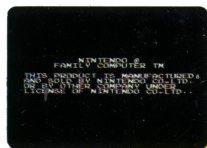
waveJack
IMA-GIN
銀河伝承
GALAXY ODYSSEY
ディプロイ
ギズム
ギガ族
グラビノーヴァ
サトル
ウノーラ
リタ
ライル
ウリュー
パキーラ
ネブラ
NEBULA
DISK SYSTEM
ファミリー コンピュータ ディスク システム
ファミリー コンピュータ・ファミコンは任天堂の商標です。

GALAXY ODYSSEY

もくじ

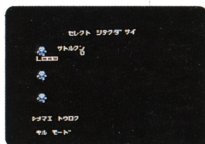
ゲームを始めるには、前準備が必要だ!!

ディスクシステムゲームを起動しよう

1 ファミリーコンピュータ本体とRAMアダプタ、ディスクドライブを正しく接続してON! 左下の画面が出てくるヨ。

2 画面が出たら、カードのSIDE Aを上にしてセットしてネ。右上の画面になる。正しければ画面が変わって右の画面が出るはず。AB SIDE ERR.07と出たらSIDE A、Bを確かめてネ。

3 ディスクのSIDE Aが、ちゃんとセットされたら、お待ちかね右のタイトル画面が登場するヨ。スタートボタンを押して名前登録画面に進もう!

※ちゃんとゲームができない時は、31ページの一覧表で原因を調べて、処置してネ。

君のサトルをディスクカードの中に作ろう！

買ったばかりのディスクの中には、ゲームの主人公サトルはいない。サトルはプレーヤーが登録して作るんだ。左上の画面が出たらSELECTボタンで▶を「ナマエトウロク」に合わせ、STARTボタンを押そう。左下の画面になったら十字ボタンで5文字までの名前をつける。終わったらSTARTボタンを押してね。

今まであったサトルを作りかえたいときには

サトルをはじめから作りかえたくなったら、「KILLモード」に▶を合わせ、STARTボタンを押す。作り直したいサトルに▶を合わせて、STARTボタンを押すと名前が消える。消したら「KILLオワル」に▶を合わせて、STARTボタンを押そう。あとは最初のときと同じように、名前を入れ直せばいいんだ。

KILLするってどういうこと？

KILLされてしまったサトルは、ディスクカードの中からいなくなってしまうんだ。それまであったサトルのデータを消してしまうこと、それがサトルをKILLするっていうことなんだ。

もしもゲームオーバーになったら！

もっと続けてゲームをしたい！

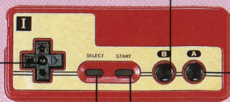
サトルが力尽きてゲームオーバーになっても、左の画面で▶を「ツヅケル」に合わせてSTARTボタンを押すと、持っているものはそのままで続けられるヨ。

また今度続きをやりたい！

きょうはこれでゲームはおしまいというときは、「オワル」に▶を合わせて、STARTボタンを押す。サトルが持っているものなどが、そのまま記録される。

このゲームはなしにして新しく始める

「ヤリナオス」に▶を合わせてSTARTボタンを押すとゲームの内容は記録されないんだ。

コントローラーの使い方

さぁ、ホープ星をめざして出発しよう!!

ホープ星とホープ星をとりまく5つの衛星でそれぞれ1つずつのクリアアイテム"キルノ"を手に入れホープ星のZエリアのある場所で、集めた物と"神の薬"を交換するんだ。"神の薬"こそが、キリル星をスード病から救うことができるんだ。

シューティング(空中画面)でなにができるか!!

ゲーム中にSTARTボタンを押すと左ページのメニュー画面がでてくるんだ。今やっているゲームのコンディションを見ることができるし、ワープをしたいときや通信したいとき、薬を使いたいときには、このメニュー画面でセレクトできるんだ。ゲームにもどるときはこの画面からⒷボタンを押してネ。

1 金色のワクの中のAからZの文字は、ホープ星と5つの衛星のエリアなんだ。サトルが冒険の間にワープコードを取ると、文字が白く変わるんだゾ。

2 画面の右サイドに表示されている文字は、現在、君が持っているゴールドやキャノン砲の弾、ラムラの種などの数や、武器のレベルをおしえてくれるんだ。

3 ワープをしたいとき、薬を使いたいとき、そして、通信をしたいときは、それぞれのセレクト画面を呼び出せる。▼を十字ボタンで選びたい画面のマークに合わせⒶボタンで呼び出すんだ。各画面が出てくるぞ。メニュー画面にもどりたいときは、Ⓑボタンを押してネ。

4 6つの星の頭文字を表わしたアルファベットが点滅している場所が、いまネブラのいる星なんだ。そしてバックの色が点滅していたら、その星で〝キルノ〟を手に入れているということ。だから〝神の薬〟を手に入れる時には全部の星のバックが点滅していないといけないネ。

●ワープしたいとき

いまいる星以外で、ワープコードを取っているほかのエリアにワープしたいときは、『 』を十字ボタンで動かしてワープしたいエリアに合わせてネ。

Ⓐボタンでワープ!! 選んだエリアの上空にワープできるゾ。

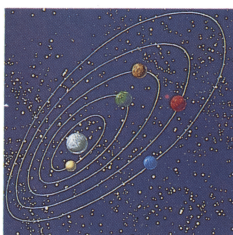
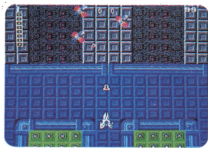
●薬を使いたいとき

君のサトルが地上で手に入れたルトン、ラルフ、マグの３種の薬は、ここでリタがうまく使ってくれるヨ。▼を十字ボタンで、使いたい薬に合わせて、Ⓐボタンで決定だ。薬はうまく使って欲しいなっ!

●通信したいとき

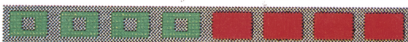
手に入れた通信コードの４ケタの番号を、CODE No.に入れてネ。コードの数字は十字ボタンの上下で入力できるんだ。十字ボタンの左右で▲が動くゾ。

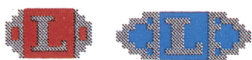
４ケタの数字が正しく入ったらⒶボタンで通信。通信が終わったらⒷボタンでメニュー画面にもどれるゾ。

シューティングゲームとロールプレイングゲーム

ホープ星を始めとする6つの星はそれぞれちがった色のプロテクトシールドを持っている。それぞれの星で空中と地上の両方でゲームができるんだ。シューティングで地上の入り口で画面が止まるから、地上に降りる時はⒶボタン、このままシューティングを続けるときはⒷボタンを押すんだ。地上に降りたら、Ⓑボタンでいつでもウリューを呼べるんだ。ウリューに乗ればまたネブラに帰れるヨ。

サトルやネブラの生命はライフ表示で表われる

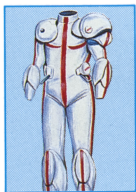
はじめに持っているライフタンクは3つなんだ。その中には赤いライフがつまっている。これがなくなるとアウト‼でも、

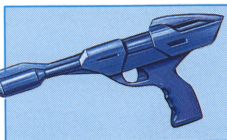
敵をやっつけるとライフを手に入れることもできる。ライフタンクを集

めると、9個目からは緑で表示されるヨ。空

のタンクは中が黒くなる。黒いタンクがあるとワープができないゾ。

サトルが敵と戦うための主要装備

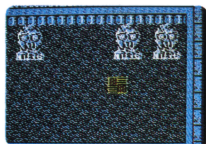
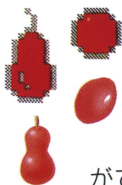
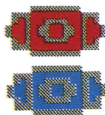
●パワーグローブ　レベル１から３まで。レベルが上るほど能力も高くなる。レベル１は、最初からサトルに装備されているんだ。レベル２と３はお店で売っているヨ。

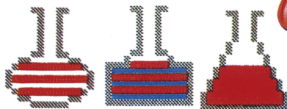
●ヘルメット　レベル１から４まで。レベルが上るとガス沼でのダメージが少なくなる。レベル１は最初から装備されている。レベル２から４はお店で売っているんだ。買ってネ。

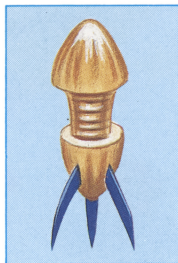
●パワースーツ　レベル１から４まで。レベルが上るほど防御力がアップする。レベル１は最初から装備している。レベル２から４はお店で売っているヨ。

●ビームガン　レベル１から４まで。レベル１は最初から装備されている。レベル２から４はお店で売っているヨ。

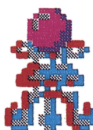
●スーパービームガン　レベル４のビームガンより、もっと威力がある。でもお店では売ってない。ということは？

サトルの冒険に欠かせないいろいろなアイテム

●ホープ星系の通貨ゴールド　敵をやっつけると手に入ることが多い。その額は2種類。ゴールドをためて、お店でいろいろな役にたつ物を買うことができる。サトルやネブラをパワーアップさせていくために は欠かせない大切なものだゾ。

●オキシゲン　地上はキリル星より酸素が薄いのでオキシゲンが必要。空中で手に入れて地上に降りよう。これが切れるとライフが減り始めちゃうゾ。

●ラムラの種　地上の種のお店で売っている。8個まで持つことができるヨ。畑の上でⒶボタンを押すとまくことができる。順調に育つとアトラスの実になるはずだ。

●薬ルトン、ラルフ、マグ　ルトンとラルフは地上のお店で売っているけど、マグは敵をやっつけないと手に入らないゾ。ルトンはライフに、ラルフはゴールドに、マグはオキシゲンになる。持てる数は8個ずつだヨ。

●キャノン砲の弾（ケミカルキャノン）

ネブラにはツイン砲のほかにキャノン砲が装備されている。キャノン砲の弾（ケミカルキャノン）は地上に降りた時お店で買おうネ。敵をやっつけると落していくこともある。ツイン砲に比べて宇宙生物をやっつけるのに有効なんだ。

●通信機　地上のお店で売っているんだ。通信機を手に入れておいて、通信コードを持っていると、ネブラに帰ってから通信ができる。役立つ情報をもらえるかもネ!!

●不思議なパーツ　このパーツは地上のどのお店でも売っていない。地上のどこかにかくされているんだ。さがしてみようネ。ネブラに持って帰ると、ライルがなにかに役立ててくれるはずだ。大切なパーツだよ。

●通信コード　通信機を手に入れて、地上で通信コードを取るとネブラの船内で、通信することができるようになるんだ。通信コードのある洞くつへ行かないとダメなんだ！

●ワープコード　6つの星の26のエリアで、そのエリアのワープコードが取れるんだ。ワープコードを取っておくとほかの星から指定したエリアにワープすることができる。

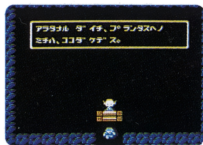
サトルの冒険に重要なカギとなる場所

●お店

敵をたおすために必要な武器や、冒険で必要な装備やアイテムは洞くつの中にあるお店で売っている。お店は、それぞれが専門店。ひとつのものしか売っていないんだ。どこになんのお店があるか覚えとかなきゃネ！

●古代ホープ語の石板がある洞くつ

地下の洞くつには、古代ホープ語のほられた石板があるんだ。古代ホープ語を解読するとヒントがあるヨ。小説をよく読んで、謎を解いてみよう。

●ワープポイント

ホープ星をとりまく5つの衛星にそれぞれ1ヵ所づつあるんだ。次の星へ進める唯一の方法がこのワープポイントからワープすること。どこにあるか、さがしてみようネ。

サトルと冒険の仲間たち

●サトル　ハイスクールに通っているスペースパイロット志望の少年。ふだんは無口だけれど、いざというときはすごくたよりになる勇敢な性格だ。"神の薬"を求めて、冒険を重ねる主人公なんだ。

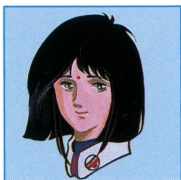
●リタ　サトルの同級生で冒険の仲間。インド系の美少女。薬の扱いはおまかせ!!

●ライル　サトルの同級生だ。メカにすごく強いんだ。ネブラを強化してくれる。

●ピノ　地下の洞くつにいる、不思議なテレパシー人種。ヒントをくれたりお店の人になったり、サトルを助ける。

●ウリュー　ネブラから地上に降りるとき使う、ひとり用のカプセルなんだ。

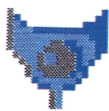
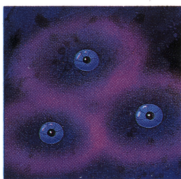
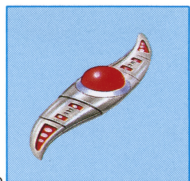
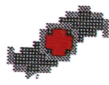
●ネブラ　サトル達が乗っている星間宇宙船。キャノン砲などを装備する。

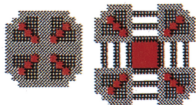
ホープ星系図鑑

●ホープ星にたどりつくまでのあいだに、いろいろな敵に出会うんだ。どんな敵がいるのかを、研究しておこうね。

第5衛星エスダール

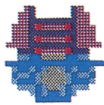
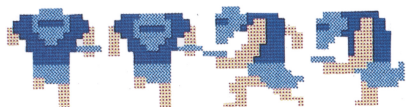
●ゲール　エスダールの空中で待ちうけるメカ。すばやい動きで攻撃してくるんだ。すばしこい動きと、連射砲が手強いぞ。よく動きを見て反撃しないと、アブナイんだゾ。

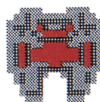
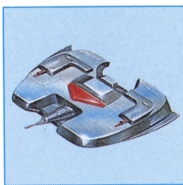
●ルガ　エスダールの空中に生息している不思議な生命体だ。3個で1体となっている。核の外側から光を発しながら、ゆっくり近づいてきてネブラをおそう。

●フープラ　空中を飛びまわっている敵の無人迎撃機だ。ブーメランのように回転しながら体当たりをしてくる。弾は撃たないが動き方に注意。

●キリス

空中を飛んでいる金属製の物体。動きは単純だけどなかなか破壊できない。1万年前のホープ星人の遺物だと伝えられている。不思議な力を発して、近づいてくる物を破壊してしまうんだ。伝説の物体なんだ。

●パトウィン

エスダール星の空中を飛びまわる無人の敵迎撃機だ。開いたり閉じたりしながら飛んで体当たりをしかけてくる。動きが単純だから倒しやすい。

●ラグ

エスダール星に生息している、巨大な昆虫を、戦闘用にサイボーグにしたもの。空中でネブラを待ちうけている。口の部分にファイアービーム砲を装備している。攻撃力は普通だけれど、ファイアービームに当たらないように、うまくネブラを操作しよう。

●ギガ族

地上でサトルを攻撃してくる。人間にものすごく似ているエスダール星の原人。ボウガンを持っていて、すぐに撃ってくる。エスダール星のあちこちにいるのでサトルが苦労する。数は多いけど、そんなに強い攻撃力を持っているわけではない。

●フェイン

空中でネブラに攻撃をしかけてくる。有人迎撃機で、ゆっくりとした動きがこのフェインの特徴だ。武器はバルカン砲が装備されている。うまくかわしながら、やっつけてしまえ！

●キーパス

X線天体接近期の前までは、小さなかわいらしい虫だったが、X線の放射によって巨大化してしまった突然変異種。すばしっこく動き体当たりしてくるヨ。数が多いと苦戦する。

●ロックドラゴン

岩場の洞くつにすんでいる。近づくと口から火を吐いて攻撃してくる。巨大で、生命力が強いので、簡単にやっつけられない強敵だ。

●キーベル

普段はおとなしいが、テリトリーを荒すとおこって攻撃してくる。動きはニブイけど、口のビームには注意。

●アマンダス

湖にすんでいる妖獣。水の中から突然顔を出してファイアーボールで攻撃してくる。ふいうちに気を付けて!!

●サーベグ

ベグという動物のサイボーグだ。体がメカなので、なかなかやっつけられないのが困ったもの。

第4衛星プランタス

●ギラン

合体型迎撃機。防御力がありビームキャノン砲を持つ。

●プラントン

空中を漂う宇宙クラゲ。高圧電流を放出してくる。

●チャプ

ネブラに体当たりする正体不明の宇宙プランクトン。

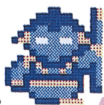
●スパーラ

感情を持った超高等コンピュータ搭載の迎撃ステーション。攻撃されるとダメージが大だ。

●パキーラ

草原にはえている巨大な植物。葉の部分に毒がある。さわらないように。

●チョヒール

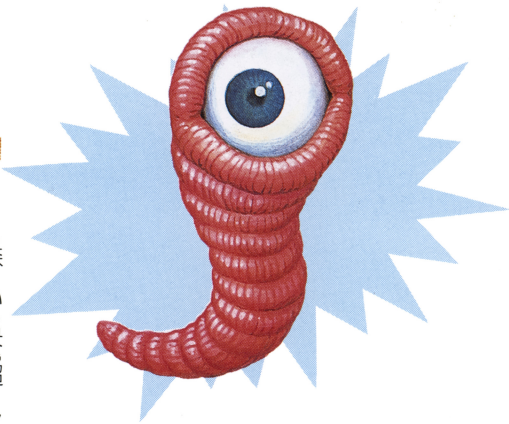
草原に待ちかまえている宇宙ヒル。さされるとダメージが大きいぞ。

●カマッカ

草原にすむ巨大なカマキリ。生命力が強く、ファイアーボールを吐く。

●シドル

プランタス星の森の住人。不思議な杖を持つ。ファイアーボールの連続的な攻撃はかなり強力だ。注意が必要な敵。

●メワーム

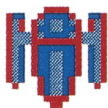
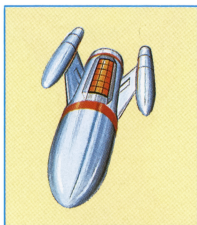
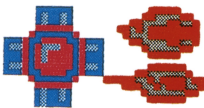
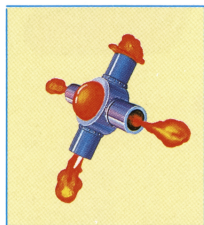
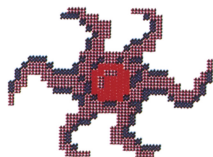
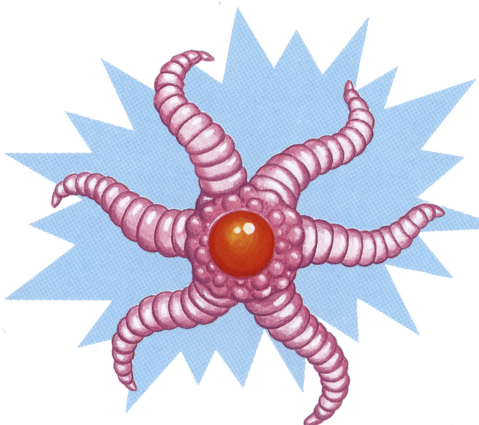
プランタス星の森の奥深くすんでいる怪物。頭の中央の大きな眼から超音波リングを発して攻撃をしかけてくる。はって進むためか動き方がのろい。そこをうまく攻撃して、やっつけよう。

●リガード

なぜか、草原にいるヤドカリロボット。強じんなカラがプロテクトしているので防御力はかなり高い。しかし動きがにぶく、攻撃力もさほど強くない。

●ラムス

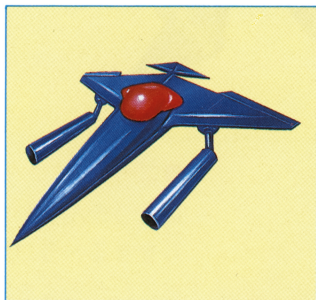
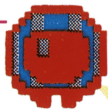
森の中にすんでいるラムスは、動きがどちらかというとにぶい。防御力もさほど強くない。が油断しているとファイアーボールで攻撃してくるぞ。

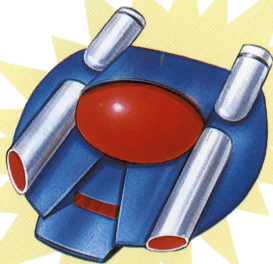
第3衛星レイクシー

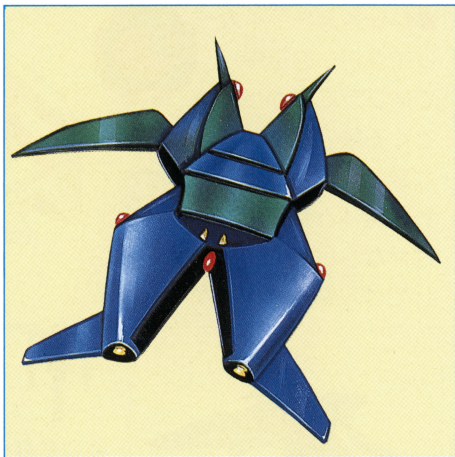
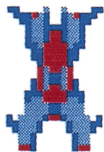
●スピット　レイクシー星の空中でネブラに攻撃をしかけてくる誘動ミサイル。体当たりされるとダメージが大きいぞ、注意して戦おうネ。

●バーストン
空中を浮遊しているバズーカだ。動きは直線的で遅い。巨大なファイアーボールが武器なんだ。注意しよう。

●ウノーラ
空中にすんでいる不気味で巨大な宇宙ヒトデだ。X線天体の影響で、強い生命力を持った、かなり手強い敵だぞ。

●レッドストライカー

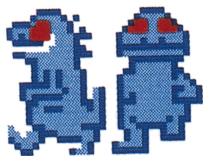
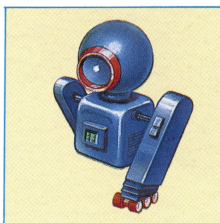
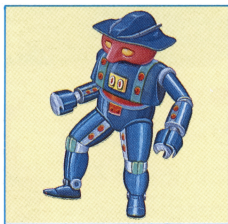
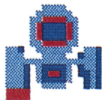
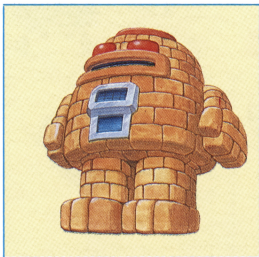
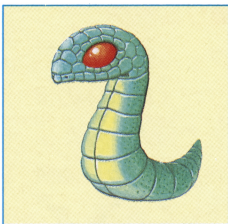
レイクシーの空中でネブラに向かってくる敵の中では、一番ハデな敵だ。カラフルに色分けされた機体と特徴のある動き方はかなり目立つから、目標としては攻撃しやすいかな!?

●ランスター

レイクシー空中でネブラに迫ってくる。かなりの高速だが動きは単純きわまりないぞ。ただしビーム砲を連射して攻撃してくるので、じゅうぶん注意をして戦いたいネ。

●ドノーク

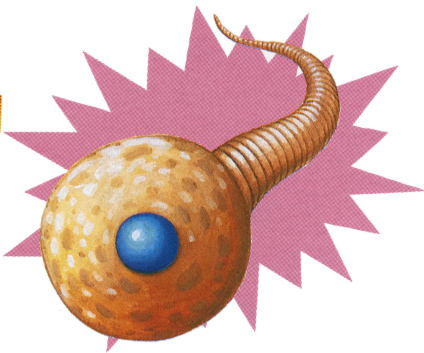
ドノークでなんといっても注意したいのは、その変則的な動き方だ。動きを読みとることは、かなり困難だけれど、防御力が弱いというのが弱点なんだ。だから、空中の敵としては、そんなにこわくないぞ。

●ギズム

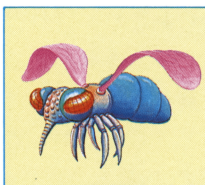
空中で攻撃をしかけてくる、敵の大型迎撃機だ。動きはやや速い。変則的な動き方をし、攻撃力が強いので注意が必要だ。レイクシー以外の星にも出現するぞ。

●ゴードン

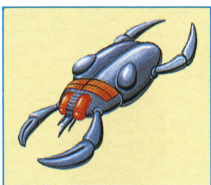
ひょうきんな動き方をするドラゴンだ。口から炎を吐きながら走り回るのが特徴だぞ。炎にやられるとダメージが大きい。

●フラッキー　人間によく似たロボット。遺跡の近くをウロウロしているんだ。フラッキーの得意な攻撃は、フラッキービームと呼ばれる眼からのビーム。金属ボディを持つので防御力が強い。

●キャリック　ローラーのついた2本のアームで、スルスルと移動していくのがキャリックだ。攻撃力はどちらかというと強くないロボットだけれど、防御力が強いのでなかなか手強いぞ。

●ヒッコ　レイクシーの地上の上を浮かんでいくヒッコは、体内に、反重力能力を備えた生物だ。弾を撃つなどの攻撃はしないけれど、どんな障害物も越えてしまうので注意しよう。

●ボア　レイクシーの遺跡を守っている古い神像。遺跡に侵入すると攻撃してくる。あまり動かないけれど口からファイアービームを発射するから注意したい。神像だけあって、攻撃に対しての防御力は強い。

第2衛星ダール

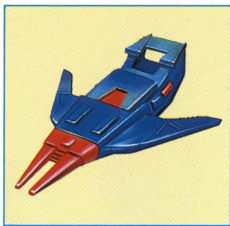
●ゾヴィ

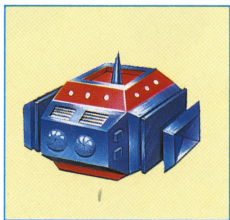
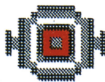
ダール星の空中にいる正体不明の宇宙生物の一種だぞ。不気味に発光しながら、ネブラにおそいかかってくるんだ。生命力が強くてツイン砲では歯がたたない。手強い敵生物だ。

●リューク

ダール星の宇宙アブがX線天体の接近で巨大化した生物。ネブラに急降下してライフをうばう。

●ギグル

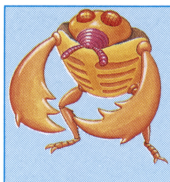
固いこうらは、ツイン砲をはねかえしてしまう。ファイアービームで攻撃してくるんだ。

●カプスン

地球のクワガタ虫に似た巨大宇宙昆虫なんだ。大きなキバからファイアービームを発する。

●ジュータス　ダール星の敵小型戦闘機がジュータスだ。すばしこく動き、ネブラが進むのをじゃまする。攻撃はビーム砲で行うんだ。第4衛星プランタスでも、出現するぞ!!

●カイム　ダール星の空中を飛び回る円盤型の偵察機。ビーム砲を装備しているが、攻撃力としてはかなり弱い。ただし、偵察機だけあって動きは、おどろくほどにすばしっこいんだ。

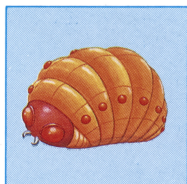
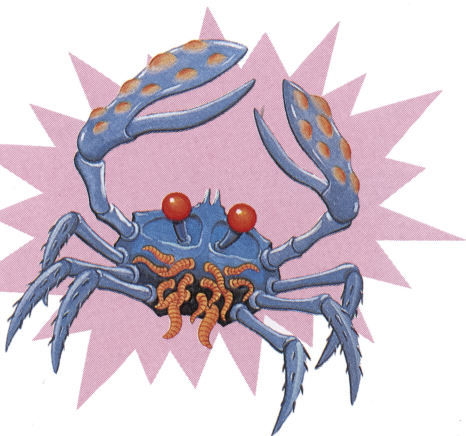
●テークス　空中で待ち受けている。弾を撃って攻撃してくることはないがそのかわり、テークス自体が強力な爆弾だ。そのため、体当たりはさけないと、ダメージがかなり大きいんだ。

●ジンメンガン　ダール星の空中を飛びまわっている、人の顔の形をした不思議な岩石。弾を撃ってくるということはないが、ツイン砲をはじき返すほど固い。ぶつからないように、うまくさけようネ!!

●ボブスン　バッファローに似た半獣人。ビームソードが武器だ。

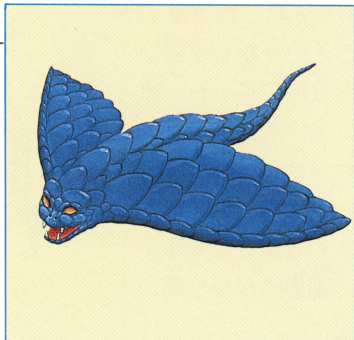
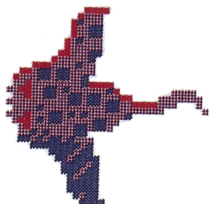
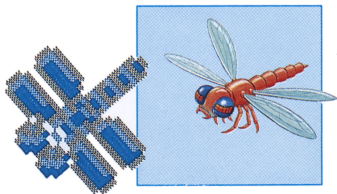
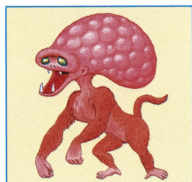
●スピーク　大きなカマ状の腕で、近づく者をはさんで攻撃してくる。

●スターン　宇宙の死神。宙を舞うように飛行し、ビームを放ってくる。

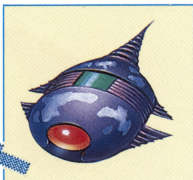
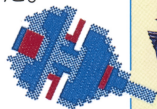
●ムック　妖獣の星ダールで最も動きがにぶいが、口から毒を吐く。

●グラビノーヴァ

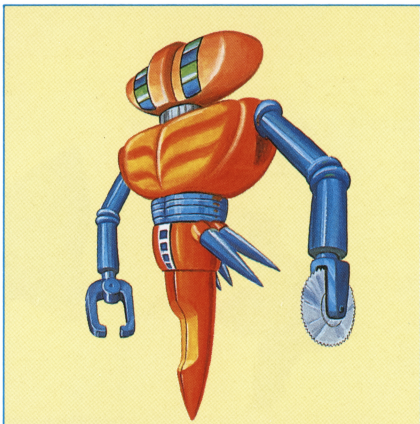
ダール星の宮殿の入口を守っている巨大なカニの妖獣。口からファイアービームを吐き、サトルの侵入を阻止しようとするんだ。

第1衛星マイラス

●デュプロイ

空中を泳ぐようにして飛行する巨大な宇宙エイ。攻撃力、防御力ともにかなり高い。手強いぞ。

●ガチュラ　一部ロボット化された巨大宇宙トンボだぞ。

●トニコーマ　固いこうらに包まれた宇宙生物。かなり手強い敵なんだ。

●オークトン　サルに似た妖獣で、口からファイアーボールを吐くんだ。

●リッチ　ダチョウに似たロボット。スピードのある攻撃が得意技だ。

●ザックス

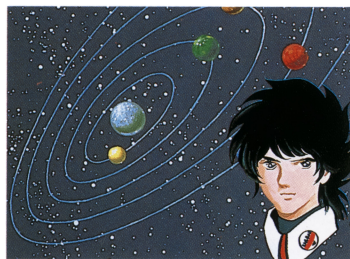
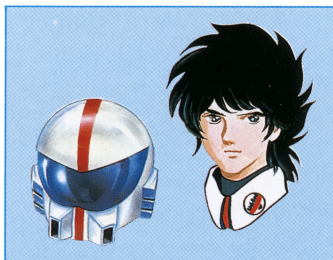
地上で、サトルにおそいかかる手強い高性能ロボット。宙に浮いて移動する。センサーを装備しているので、近づくとすぐ攻撃してくる。防御力はかなり高いゾ!!

ホープ星

●?

惑星ホープにたどり着くと、出会う謎の敵キャラなんだ。生物なのか、メカなのか、どんな敵であるかは、いっさいわからない。サトルが突破しなくちゃならない最後の難関だ。

ゲームのヒントをおしえちゃおう！

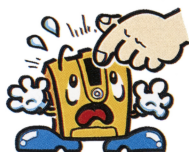
1 ヘルメットはガス沼でのダメージを減らすだけじゃないんだ。オキシゲンの減る量も違うんだョ。もちろん、値段の高い方が、減る量も少なくなっていくんじゃないかナァ!?

2 敵とは別に、危険がイッパイ。プランタス星の石やレイクシー星の石像、ダール星のドクロ岩など、さわっただけでダメージを受けてしまうものもあるんだゾ／気をつけよう。

3 3種類の薬はお店で買ったり敵を倒すと出現したりするのは知ってるヨネ。でもひとつ注意／ラルフの薬は数が少ないんだ。続けて買いこむと品切れもあるヨ。今度はいつ入荷するのかな？

これだけは覚えておいてほしい注意事項

ディスクカードは今までのカセットよりもデリケート。注意事項を守ってやらないと、こわれちゃうぞ！

ディスクカードは大切に取り扱おう！

●ディスクカードの窓から見える茶色の磁気フィルム部分には、絶対に指などで直接触れないで！それから、そこを汚したり傷つけたりしないようにも気をつけよう。

●湿気や暑さにはとっても弱い。風通しのよい涼しい場所に保管しよう。

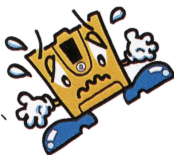
●ゴミゴミしたところは大キライ！ホコリは大敵なのだ。

●磁石を近づけると、データが消えちゃう。テレビ、ラジオなども磁力がある。近づけないでね。

●踏んづけたりするのはもってのほか。ケースの中に入れておいてね！

ディスクドライブの赤ランプがついている時、ＥＪＥＣＴボタンや本体のＲＥＳＥＴボタン、電源スイッチに手を触れちゃダメ。ディスクシステムの説明書もよく読もう！

ディスクシステムが正常に作動しなくなったときには…

ディスクシステムが正常に作動しないときには、画面に異常を知らせるエラーメッセージが表示されるよ。君のディスク･システムでエラーが出たら、下の表を参考にして原因を調べよう！

エラーメッセージ	内容と対処方法
DISK SET ERR.01	ディスクカードがちゃんとセットされていない。カードを取り出し、もう1度セットしなおそう。
BATTERY ERR.02	ディスクドライブの電圧が規定値以下になっている。乾電池を新しいものと交換しよう。
ERR.03	ディスクカードのツメが折れている。ほかのカードを使うか、ツメのところにテープをはる。
ERR.04	違ったメーカーのディスクカードがセットされている。カードをよく確かめよう。
ERR.05	違ったゲーム名のディスクカードがセットされている。カードのゲーム名を確かめよう。
ERR.06	違ったバージョンのディスクカードがセットされている。カードをよく確かめよう。
A,B SIDE ERR.07	ディスクカードの表と裏が逆にセットされている。
ERR.08	違った順番のディスクカードがセットされている。カードをセットする順番を確かめよう。
ERR.20～	ディスクカードを買ったお店か、発売元に相談しよう。

ゲーム内容などについての電話でのお問い合わせには、一切お答えできませんので、ご了承ください。

1986年11月6日初版

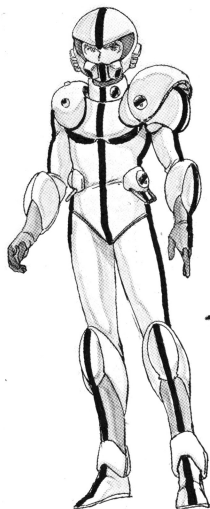
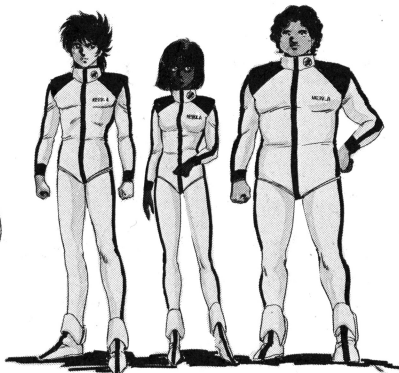
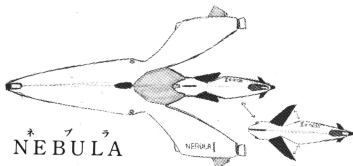
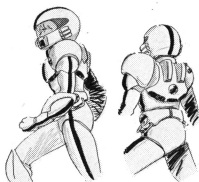
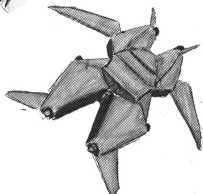
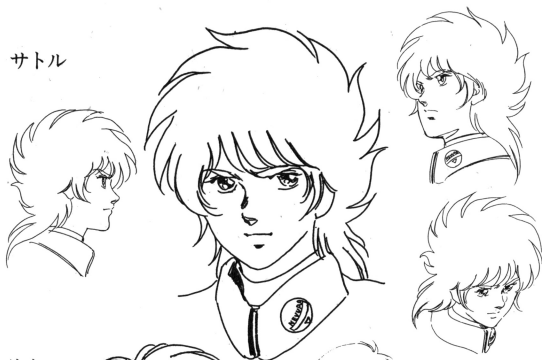
制作・発売元 イマジニア株式会社

〒106 東京都新宿区西新宿2-7-1 新宿第一生命ビル15階

☎(03)993-8855

印刷 凸版印刷株式会社

キャラクターデザイン 岡崎つぐお

作 田部裕文

岡崎つぐお　メカ・コスチュームデザインノート
おかざき
NEBULA
NEBULA
NEBULA
ライル
リタ
サトル
パワースーツ
ネブラ
NEBULA
NEBULA
ウリュー
URYU
てきせんとう うちゅうせん
敵戦闘宇宙船

岡崎(おかざき)つぐお　キャラクターデザインノート
サトル
リタ
ライル

アーリー語辞典

〔意味〕	アーリー語

〔色〕

青い	フラーナ
赤い	ルージャ
金(色)の	ゴラド
銀(色)の	アルゲンタ
白い	ブラーカ
茶(色)の	ブラウナ
灰(色)の	グレア
緑(色)の	ベルダ

〔場所〕

岩	ロキオ
海	マリノ
川	リボ
島	イランダ
中心地	メゾネ
土地	ラーダ
沼	マロ
畑	フィルダ
浜	ミオータ
湖	ロコ
森	アルバータ
山	モンティオ

〔天体〕

空	ティエラ
太陽	スーニ
月	ルーニ
星	スチロ

〔人体〕

頭	カーポ
口	ブソ
手	マノ
骨	ナボ

〔その他〕

愛	アーモ
石像	ストア イマゴ
あなた	ビオ

〔動詞〕

行く	イール
輝く	シャーヌ
～である	エスル
手に入れる	ゲーツ
～になる	ゲティヌ
昇る	リルズ
開く	アピーヌ
見る	ビド
持つ	ハルド

あ	い	う	え	お						
か	き	く	け	こ		が	ぎ	ぐ	げ	ご
さ	し	す	せ	そ		ざ	じ	ず	ぜ	ぞ
た	ち	つ	て	と		だ	でぃ	どぅ	で	ど
な	に	ぬ	ね	の						
は	ひ	ふ	へ	ほ		ば	び	ぶ	べ	ぼ
ま	み	む	め	も		ぱ	ぴ	ぷ	ぺ	ぽ
や		ゆ		よ		ふぁ	ふぃ	ふぅ	ふぇ	ふぉ
ら	り	る	れ	ろ						
わ	うぃ		うぇ	を		ん				

『五十音表』

リタが神の文字の最初の二行分を書き入れています。読者のみなさんも、自分で続きを書き入れてください。神の文字だけでは埋まりきらない部分もありますが、後は自分で推理してみてください。

ライルが、リタが、サトルの手を握りしめていた。三人は堅く手を握り合って、お互いの眼を見つめ合った。なにも言わなくても気持ちは痛いほどわかった。

「よし、出航だ！」

スクリーンに映るホープ星の大地が次第に遠ざかっていく。

苦しかったけど懐かしい。

思いは三人とも同じだった。

地平線が大きな弧となり、やがて円となって小さくなっていった。そうしてホープが小さな六色の点となるまで、三人はスクリーンの前から離れられなかった。

そのホープを見ながらサトルは思った。自分達のことも、一万年後のキリルに、伝承となって残されているだろうか、と。

「あの歌にあった六つの宝が、薬のある場所の扉を開く鍵だったんだ。」
「ふーん。じゃあ、キルノっていうのは鍵っていう意味だったのね。」
リタは一人で納得していた。
その時、マイミの声が響いた。
『結果がでました。確かにこれはスード・ウイルスに強い効果があります。これでキリルを救えるでしょう』
サトルたちがあの奇妙な生物をやっつけたように、ホープの薬が強い抗体となってスード・ウイルスを次々に打ちのめすのだろう。
マイミの声が終わらないうちに、ライルが飛び跳ねながら何度も「ヤッホー！」と叫び出した。リタは何も言わずに泣き出した。
サトルも目頭に熱いものを感じていた。閉じたまぶたの裏にエミリアの面影が浮かんだ。そして両親、チャドラ先生、ライルの妹……。

考えられないもんな。」
「そうね、エックス線天体がやってきたころの生物が、変異した結果じゃないかしら。」
サトルは、ホープの奇妙な生物たちを思い出して、いまさらながら身震いした。
「ホープ人って、やっぱり地球にすみ着いたんだとオレは思うぜ。」
ライルは両手を後ろで組んだまま、椅子の背もたれに巨体をずしんとぶつけて言った。
「ホープ人っていまもどこかを放浪しているんじゃないかしら」
リタの瞳は遠く銀河の果てを見ている。
「ところでサトル。」とライルが椅子から身を起こしながら聞いた。
「最後の薬はどうやって手に入れたんだい。」

「その間に、石板に残したメッセージが、いつのまにか国歌になったというわけね。」

いろいろなことが、すべて筋道が合ってわかってきた。

「とすると……。」とライルがその興奮をおさえかねたように言った。「その歌がいまも伝わっているということは、キリル人や地球人はホープ人の子孫だってことなのかい。」

「いや、そうとも限らないと思う。ホープ人が地球やキリルに行ったころは、きっと両方とも未開の状態だったんだ。だから天から降りてきたホープ人を神としてあがめ、神の歌をそのまま大切に伝えたと考えたほうが自然な気がする。」

「だったらホープ人たちは、いったいどこへいってしまったんだろう。いまホープにいるのが、放浪から戻ってきた人たちとは、とてもじゃないが

「これは、ホープの人々が自分達の大地をたたえた歌なのよ。そうよ、国歌かもしれないわ。遠くホープを離れた人たちが異境の地でなつかしい故郷をしのんで歌った歌が、その地に伝承として残されていったんだわ。」
読み終えたリタが、上気したほおに手を当てて冷やしながら、叫ぶように言った。すかさずライルが興奮して付け加えた。
「そうか、キリルを救うためだけに残したメッセージなら、何も石板と石碑の両方に同じ内容のものを残す必要はないし、スード流星群の軌道にない地球に伝える必要もないというわけだ。」
「うん。それに第一、わざわざホープの石碑の最後に書いているのもおかしい。おそらく、キリルに石板が残された前回の流星群のときと、石碑の歌が伝えられたホープ滅亡の頃とは、かなりの時間の隔たりがあったんじゃないかな。」

異をもたらすと予測される。
エックス線天体が相手では、プロテクトシールドもほとんど役に立たない。われわれが長い間の努力で維持してきた平和が、いま自然の手によって破壊されようとは、まことに皮肉なことと言わねばならない。
われわれは、このホープを離れ、宇宙放浪の旅に出ることを決意した。
エックス線天体の影響が完全に消えるのは、およそ八〇〇〇年後と推定される。そのとき、われわれの子孫は長い放浪の旅を終えて再びこの地に戻り、文明を復活させることになるだろう。
栄光あるホープ星に、再び文明の復興を祈って。

ホープ首長　ラト　ス》

そしてその下には、ファブの神殿にあった石碑の歌詞、サトルたちが薬を捜す手掛かりとなったあの文字が刻まれていた。

「サトル。あなた、今のホープにいるテレパシー人種は、昔キリルに来たホープ人と違うような気がするっていってたわね。」

「ああ。今のテレパシー人種もそれなりに文明をもっているけど、あの文字を読めないし、それにところどころにあった機械の使い方なんかも知らなかったくらいだからね。でも、そのことがそこに書いてあるのかい？」

「そうなのよ。今言った文字とか機械とか、それに不思議な生物のことも、これを読めば想像がつくわ。いい、読むわよ。」

リタが訳しながら読みあげた石碑の文字は、次のような内容だった。

≪ホープ暦八三五四年

ホープはいま、恐ろしい危機を迎えている。それは、ホープにエックス線天体が近づきつつあるからだ。

この天体は今後、数千年にわたってホープのあらゆる生命体に大きな変

石碑が写っている。一緒に写っている樹木からいっても、かなり巨大な石碑らしいとわかった。

「ホープ星で見つけたんだよ。なにか重要なことが書かれているみたいだったから、写真に撮って持ってきたんだ。訳してみてくれないか。」

リタの目が写真の文字の上を追っていく。それは徐々に真剣になっていった。首を振り、うなずき、そうして悲しげな表情をみせながら、リタは写真に顔が触れるほどに近づけて読み進めていった。

「どうだい、何かわかったかい。」

ライルが横からのぞきこんで聞いた。

「すごいわ。これでホープのなぞがかなり解けるみたいよ。」

リタは興奮ぎみに言いながらも、目は文字から離れなかった。ライルの目が期待に輝いていた。それはサトルも同じだった。

サトルも、これまでの苦闘を思うと胸に熱いものがこみ上げていた。しかし、薬の効能を試したあとでなければ喜ぶのはまだ早い。経過から考えても完全だとは思うが、なにしろ気が遠くなるような年月を経た薬品なのだ。化学変化を起こしている可能性だってなくはないのである。

「マイミ、この薬でウイルスがどうなるか実験してみてくれ。」

サトルはマイミのロボットハンドに薬の容器を渡した。キリルから持ってきたスード・ウイルスがどうなるか、その結果をみる必要があった。それにはもう少し時間がかかる。

検査の結果が出るまでに、とサトルは思って一枚の写真を取り出した。

「リタ、もうひと仕事やってほしいんだ。」

「なによ、変なもの拾ってきたんじゃないの。」

リタは言いながら写真を手にした。そこにはホープ文字が刻み込まれた

第七章　再びキリルへ

「ウリュー」のハッチを開け、カプセルを出たサトルは、手にした薬のビンをライルとリタに見せた。緑のトロリとした液体が、フラスコ型硬化テクタイトの容器に入っている。

「やったな、サトル。」

「とうとう手にいれたのね。これで父もみんなも救われると思うと……。」

リタは涙で言葉を詰まらせていた。

『やりましたね』

マイミの声さえ、心なしか弾んで聞こえた。

「ありがとう、みんなで力を合わせた結果だよ。」

サトルがそう言い終わった瞬間だった。
『ビーッ、ビーッ』と警報システムが断続的な音を鳴らしはじめた。ブリッジ内の照明が緊急照明に切り替わると同時に、リタが急激な加速にうめいた。マイミが最大戦闘速度までネブラを加速したのだ。
『座標一三六、二八、九一。距離三〇〇〇。未確認の飛行物体です。速度八〇、われわれとの接触まであと四二秒です』
スクリーンから目を離さないでいたリタが叫んだ。
「戦闘宇宙船みたいよ！」

さて、この続きは皆さんが実際にゲームで体験することになります。ホープで薬をみつけることができたら、再びここへ戻ってきてください。
では、幸運を祈る！

いると思われるゲートのようなものが見えてきた。
「おい、あれをみろよ。やっぱり石板の言葉のように地下にもうひとつの大地があるんだ。」
ゲートを指さして、サトルが言った。
「まるで地獄への入口ね。」
「バカ、ろくでもないこと言うなよ。それにしても、地下に大地があるというより、大地の上空をシールドで覆ってあるっていう方がぴったりくるような感じだな。」
ライルが、サトルとリタの顔を見ながら言った。
「けど、ゲートがあの大きさじゃあ、ネブラで入るわけにはいかないぜ。」
「ああ、他に大きな入口があるなら話は別だけど、ウリューで行くしか手がなさそうな気もするな。」

一番外側の衛星から順を追って訪ねて行くことになっています。本星に直接着陸しようとした場合、相手側から攻撃を受けても文句は言えないのです。ではネブラの軌道を第五衛星に向けます』

マイミだけは冷静だった。

三時間後、通常ワープを終えたネブラは、第五衛星から四〇〇〇キロの距離まで接近していた。

やがて、青い色の第五衛星がぐんぐん大きくなってスクリーンに映し出されて来た。

「変な地面ね。」

リタが不気味そうにつぶやいた。

金属的な青味を帯びた地表は、幾何学的な模様に覆われている。どうみても人工のものとしか思えないのである。しばらく行くと、地下へ続いて

「おい、見ろよ。」
拡大スクリーンの映像を操作していたライルが叫んだ。
「石板に書いてあったのと同じだ。一番外の衛星は青っぽくみえるし、次のは赤っぽい。」
確かに五つの衛星は、青、赤、茶、緑、金と微妙に色彩を変えて輝いてみえた。
「間違いない、ここがホープなんだ。」
「来たのね、とうとう。」
サトルの両手を、ライルとリタが握りしめていた。興奮がその手を通して伝わってくる。サトルも上気していた。
船内にマイミの声が流れる。
『宇宙航行法では、知的生命体のすむ可能性がある惑星へ降りるとき、

路や行動についての最終決定は、サトルたちが下さなければならない場合もあるのだ。さらに万が一、マイミにトラブルがあったときのことも考えに入れねばならない。

学ぶことは多く、六〇日間はそれこそ瞬く間に過ぎた。

そうして最後の総仕上げとして、サトルは移動用小型カプセル「ウリュー」の操縦、ライルとリタはツイン砲やキャノン砲の扱いをかんぺきにこなせるまでになったところで、宇宙船ネブラは、いよいよ最後のハイパーワープを終えてラープ星系に入ったのだった。

船内のスクリーンに目的地が映し出されてくる。遠くからみた第四惑星は、確かに五つの衛星に取り囲まれて浮かんでいた。

そして近づくにしたがって、それらの衛星はそれぞれに微妙に色彩の異なることが鮮明になり出していた。

浮上感も加速感もなくなって船内が落ち着いたとき、サトルはいよいよ使命遂行の旅に出たことを実感した。未知なる前途には希望ばかりではなく、どんな難関が待ち受けているかもしれないのである。

だがライルもリタも、目には輝きがあった。

リタは自分の解読が現在の行動につながった喜び、ライルはすぐ機関室へ行って計器類に触れた喜びもあったが、その目の輝きをサトルは、自分と同じに使命感に燃えたものだと思った。

目的のラープ星系まで、ネブラの能力をフル作動させてハイパーワープすれば六二日間で着ける。

その間に三人は、計器の見方、データの読み方、手動操縦の方法などをマイミから学ぶことになった。

それらは、ほとんどマイミが自動的に操作できるものである。しかし進

「どうしてマイミがいるんだ。」
リタの叫び声。どうやらマイミは、ネブラのコンピュータに、自分の主要部分のソフトウェアを転送してしまったらしいのだ。
『説明はあとです。とにかく出発しましょう』
マイミが推進機を作動させはじめていた。低いうなり声のような音がして、船体が少しずつ浮き上がってゆく。
『どなたか、発進命令を出してください』
マイミは人間の命令がないと、勝手に飛び立つことはできないのだった。
「よし、発進！。」
サトルが号令を下した。
ネブラは静かにその巨体を浮上させると、やがて加速しつつ夜空へと溶けていった。

ドアの閉鎖と同時に船内が明るくなった。
『もう声を出してもかまいません』
コンピュータの声に三人の緊張がとけた。ライルが大きな肩で息をし、リタがホッと吐息をもらした。
「手配どおりやってくれたようだな。」
サトルも肩の力が抜けて、コンピュータへ気軽に話しかけた。
『はい、燃料と食糧は十分です。装備は十分というわけにいきませんでしたが、重火器「ツイン砲」、「キャノン砲」、小型の一人乗り移動用カプセル「ウリュー」一台、その他を用意しています』
そうして細部の説明があったあと、コンピュータは付け加えた。
『私自身がこの船に乗り込んでいますから、決して手抜かりはありません』
「えーっ、マイミなの。」

第六章　出発

ひっそりと静まりかえったアルーガ公園の広場に、その日に到着したばかりのネブラは、その巨大な船体を横たえていた。

公園広場のほのかな照明が、船体の下へ淡い影を落としている。

午前零時を回ったとき、三つの人影が走り寄ってくると、周囲に張りめぐらした鎖をくぐり抜けて乗船口に近寄っていった。ネブラの淡い影の中に人影も淡くなった。

入口横のキーボードから暗証番号一一〇四が入力されたのだろう、ドアが滑るように開き、ほの暗い船内へと三つ目の人影がすっと消えたとき、ドアはまた音もなく閉じられた。

思うと、エミリアの面影がほうふつとしてきた。とりあえず二日間は動きようがないのだ。明日は、エミリアとどこかへ遊びに行こう。ホープ星まで一緒に行ければいいがとも思ったが、どんな危険が待ち受けているかもしれないのだ。

いまはただ、スード・ウイルスの抗体になると思われる薬を持ち帰ることに専念しよう。サトルは、それが三人の使命なのだと思った。

リタが首をかしげたところで、サトルは再び肝心のことを聞いてみた。
「でも廃船じゃ燃料も何もないんだろ。」
『それは私がなんとかします』
マイミは自身ありげに言ってのけた。
サトルは、そんなことが本当にできるのかと尋ねようとしたが、詳しいことは明後日、もう一度アクセスして確認することにして回線を切った。
「やってみるか。」とライル。
「ちょっと不安だけど、こうなったらマイミの言うことを信用して、覚悟を決めるべきね。」とリタも言った。
サトルはあまりにも目まぐるしかった一日の展開に戸惑いながらも、心の底からふつふつと闘志が沸き上がってくるのを感じていた。
そうして、ライルが妹を、リタが父のことを考えているに違いないと

「どういうことなの。」

リタが言った。

『二日目が終わる午前零時をもって、私はネブラの登録を抹消します。その時間に船の管理者はいなくなるわけです。そして翌朝、ネブラはチェックされて、公園管理局のコンピュータに公園の備品として登録されるのです。その間なら、ネブラは誰のものでもない廃船ですから、乗っても泥棒にはなりません』

「だけど、次の日にはやっぱり泥棒になるわけでしょう。」

『いいえ、次の朝にチェックできなければ、公園管理局での登録はできませんから、ネブラは依然として廃船中で、その間は誰が使っても犯罪にはなりません』

「ふーん、変な理屈ね。」

マイミは可能性を検討しているらしく、三〇秒ほど黙っていた。それは長く重い時間だった。

『すべての条件を完全にとは言えませんが、なんとか満たす方法がひとつだけあります』

「ほんとか。」サトルは叫んでいた。

「それはどんな方法なんだ。」

『廃船になる宇宙船を利用する方法です。二日後に登録を抹消され、展示用としてアルーガ公園に送られる「ネブラ」という船があります。それを、その夜から明け方までに動かしてしまえばいいのです』

「やっぱり泥棒じゃない。」

しばらく黙っていたリタがあきれ顔をした。

『いいえ、泥棒にはなりません』

今度は、有望な返答だった。

「たとえば、どんな方法だい。」

『宇宙船を買うか、作るか、借りることです』

「お金がない。」

『乗組員になる方法もあります』

「最低であと三年はかかる。すぐ行きたいんだ。」

『あまり勧められませんが、盗むか、乗っ取る方法もないではありません』

「犯罪者にはなりたくないよ。」

『ずいぶん条件が厳しいですね』

「どうしても行かなきゃならないんだ。」

サトルはそう言うと、自分がすでに決心していることに気づいた。

『命令があれば飛ばせます』
「誰が命令を出すんだい。」
『人間です』
「じゃあ、オレが命令したらどうだ。」
『あなたには、その権利がありません』
「そこをなんとかする方法はないのか。」
『ありません』
そっけない返答だった。ライルが考えていたほど、現実は甘くなかった。
サトルは肩を落としたライルをみて、まったく別の角度からマイミに質問することを思いついた。
「ぼくらがその惑星へ行く方法はないか。」
『いくつでもあります』

する星はありません』
それでもサトルはしつこく質問を続けた。しかしラープ第四惑星がホープ星なのではないかという推定を、ゆるがすまでの回答はなかった。そこでサトルは、最後にその星まで行く時間を聞いた。
『宇宙船にもよりますが、ハイパーワープを使って二ヵ月くらいです』
船さえあれば、十分に行ける範囲である。
ライルがいよいよ肝心の質問に入った。
「マイミ、君は宇宙船のコントロールをしているんだね。」
『そのような、当然の質問はしないでください』
「なまいきなコンピュータだ。」
とライルがつぶやく。
「君が管理している宇宙船を一隻、その惑星へ飛ばせられるか。」

分はくるくる変わる。しかしサトルは慎重だった。ライルに代わって、確認の質問を続けた。
「惑星の名はわかるかい。」
『名前はありません。ラープ星系の第四惑星です』
ラープとホープが似ているのは、ただの偶然だろうか。
「じゃ、その惑星の色はどうかな。」
『データがありません』
「衛星についても同じだね。」
『はい、これもデータはありません』
「よし、それじゃもうひとつ念のため、別の角度から聞いてみよう。さっきの三〇の星の中に、五つの衛星の色がすべて違う星はあるかい。」
『二五の星についてしかデータはありませんが、その限りでは質問に該当

声と同時にディスプレイに数字が表示される。
「えーっ、そんなにあるの。」
マイミの答えにリタがまゆをひそめた。
「じゃあ、その中で高等生物が住める可能性のある星はいくつある。」
この質問はサトルの発案によるものだった。
『三〇です』
「うまいこと絞ったわね、ずいぶん極端に減ったもの。」
リタがげんきんにもすぐ笑顔になった。
「じゃあ、その中でスード流星群の軌道上にあるものはいくつある。」
『スード流星群については、流星が生まれる仕組みや、正確な軌道は不明ですが、わかっている範囲内ですと、一つだけです』
「やったね！」、「やったぜ。」とリタとライルが同時に叫んだ。リタの気

ライルの目が異様に輝き出していた。
「サトル、おまえの夢は宇宙船のキャプテンだろ。オレに任せてくれないか。」
サトルは返答に困った。リタも心持ち顔色をあおくしてうろたえていた。
「でもねえ……ライル本気なの。」
「ああ、いやならおりてもいいんだぜ。」
ニタリ顔が消え、すごみさえ顔に出したライルがカードを差し込む。
『はい、こちらはマイミ』
すぐに回線がつながり、ディスプレイ脇のスピーカーから単調な合成音声が流れてきて、ライルが質問に入った。
「マイミ、五つの衛星を持つ惑星は、銀河系にいくつあるんだ。」
『現在知られている範囲で五六七二八です』

「それで五つの衛星を持つ惑星を捜すのか。」
「いや、折角マイミと連絡がつくんだから、もっと有効に使えないかと思ってさ。」
ライルの意図がサトルにはわかっていた。だから電流も走ったのだ。
「まさか、ライル……。」
リタもわかったようだった。
「いいじゃないか。どうせキーナじいさんの話をしたって、誰も信じる人はいないよ。あの石板だって、スード病の薬と明言してあるわけじゃないんだ。それに伝説の若者は、たった一人で行ったんだぜ。」
「伝説はそこまであてになるとは限らないよ。」
「それはわかってるさ。でも考えてもみなよ。宇宙港っていま閉鎖中だろ。コンピュータも船もヒマを持て余してるんだぜ。」

と、手に一枚のカードをひらひらさせながらあわてて戻ってきた。
「ライル、なによそれ。」
ライルがニタリと思わせぶりに笑った。
「気持ち悪いんだから。変な笑い方すると不気味よ。」
リタの悪口を、ライルは無視して言った。
「オレの親父がさ、宇宙港コントロールセンターの副所長だってこと、まさか忘れてないよな。」
サトルは、その言葉で体に電流が走ったように感じた。コントロールセンターのコンピュータ用カード……と思ったとき、ライルがサトルの心の動きを読み取ったように言った。
「これでマイミと連絡がつくんだぜ。」
マイミとは、宇宙港を管理しているコンピュータのことである。

ったホープ人が広めた。こうなるんでしょう。ねえ、ホープ星を捜そう。さっきの島の色って惑星や衛星の色なんだきっと。青、赤、茶、緑、金、そして灰色……。」
「なるほどなあ。よし納得がいったぜ。」
ライルも次第に目を輝かせた。
「だけどさ。」と今度はサトルが困惑する番だった。
「宇宙規模となると話がやっかいなんだよな。」
「そうか。うまくホープ星がみつかったとしても、私たちだけじゃ行けないものね。」
リタがため息をつくように言って、それで三人とも黙り込んでしまった。
それは重苦しい沈黙だった。
ライルが立ち上がり、何かにつかれたように部屋を出ていったかと思う

三人とも一万年という気の遠くなるような時間で隔てられたなぞに、それぞれの想いを宇宙へとよせていた。はっとわれに返ったサトルがその沈黙を破る。

「いいかい、じゃあ仮説を簡単に整理してみよう。」

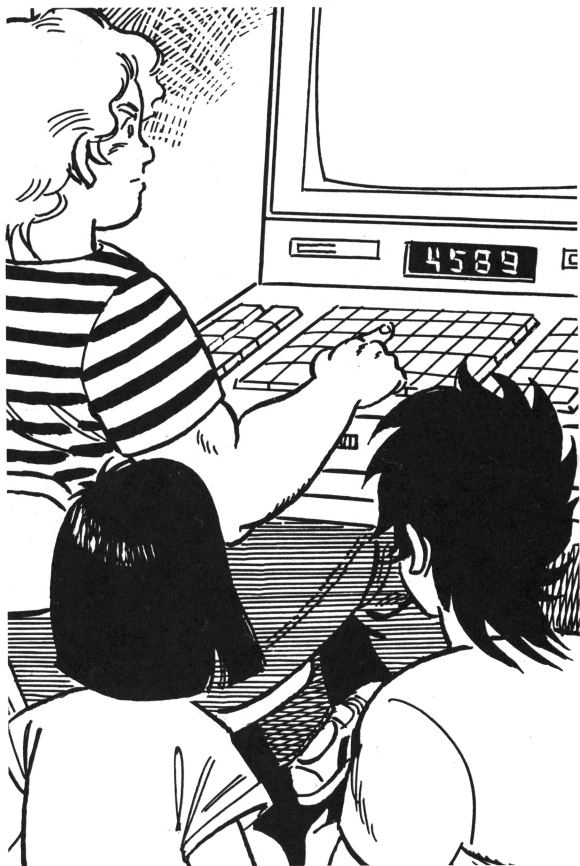
①銀河系のどこかに、五つの衛星を持ったホープという惑星がある。②ホープ人はかつてスード病を経験した。それは薬があるということで証明される。③さらにホープ人は星間飛行を行っていた。④キリルでスード病の流行に出くわしたホープ人はキリルの人々を助けた。⑤そこで若者の伝説がキリルで生まれた。

「それよ、それ。」とリタが感動していた。

「ホープ人はそれで神と呼ばれ、キリルを救った神の言葉は石碑と石板にのこされたんだわ。メロディもつけられたんでしょうね。それを地球に行

「いや、そうとしか考えられないんだ。キリルの伝説と同じ歌が地球にあるのは、偶然の一致で片付けられるかい。これは宇宙規模の話なんだ。」
「はるか昔に、キリルと地球とのつながりがあったという仮説ね。でもそれなら、誰かが星間飛行をしたことになるのよ。」
「リタ、それがホープ星の人だと思うんだ。ホープの人たちが星間飛行してキリルや地球にやってきたんじゃないかな。ひらめいてしゃべっているうち次第に仮説が整ってきたんだけど、ホープ人がキリルで神と呼ばれていたと考えたら納得がいく。」
「じゃホープ人がいたとして、どうして地球やキリルにわざわざ行ったんだろう。」
「うーん。」
リタの黒い瞳が、はるか昔に銀河を渡ったホープ人を追っているようだ。

サトルの言葉でライルは驚いたようだった。
「いや、驚かせてごめんよ。でもライル、少し考え方を変えてみると、もう一つ別の解釈もあるんだ。」
「なあに、そんなのあるの。」
リタが目を見開いてサトルを見つめた。
「惑星さ、惑星だよ。」とサトルは、キョトンとした二人をみて言った。
「いまリタが、島のひとつだけが大きいって言ったろう。それでひらめいたんだ。銀河系のことを島宇宙という言葉は昔からあったよな。それがイメージになったとき、星とか惑星なんかも島と言えるんじゃないかと思ったんだ。もしホープが五つの衛星を持つ惑星だとしたらぴったりだぞって。」
「なるほど、そうもいえるな。」

4589

ライルとリタが言いながら、キーをたたいてデータベースへのアクセスにとりかかった。その作業をみながら、サトルは神殿を出るときからの疑問に思いをめぐらしていた。

キーナじいさんの祈りと同じ歌が、どうして地球にまで伝わっていたのだろう。考えてみれば当然の疑問だったが、暗号のキーが解けかかった興奮で、そこまで頭が回らなかったのだ。だがいまは、そこがすっきりとしないと、六つの島の問題も解けないような気がする。

「これもダメね。島のひとつだけが大きいって条件に当てはまらないわ。」

リタがそう言ったときだった。サトルにはひらめくものがあった。

「待てよ、ホープって島じゃないぞ。」

「なんだい突然に。島じゃなきゃわけがわからなくなるぜ。」

叫ぶのが習慣になっているのだ。だからライルも気にしない。

しかし、気にはしないといっても、部屋はすさまじい乱雑さだった。機械いじりが好きなだけあって、工具や部品が機械類の間に散乱していて足の踏み場もない。

とりあえずライルが、奥の壁ぎわのコンピュータデスクの前だけを片付け、なんとか三つのいすを置けるようにした。

「これでよし。」とライルがスイッチを入れると、デスクの前の壁にはめこまれた三〇インチディスプレイが明るくなり、それを確かめながらライルが言った。

「どこから手をつけるべきかな。」

「まず、六つの島で成り立っている諸島や群島を調べましょうよ。」

「そうだ、そこから手をつけるしかない。」

第五章　マイミ

ビルフォードの街に帰り着いたサトルたちは、そのままライルの家へ直行した。キリル地理院のデータベースにアクセスして、六つの島のデータを調べるためには、高速のコンピュータを持っているライルのところが好都合なのだ。
神の文字は読めた。第一のなぞは解けたのだ。しかし、すべてを解き明かすには、その場所を突きとめなければならない。
「ひっどい。相変わらず汚い部屋ね。」
ライルの部屋へ入ったとたん、リタが悲鳴をあげた。しかしそれは、言ってみればあいさつがわりのようなもので、リタはここへ来ると必ずそう

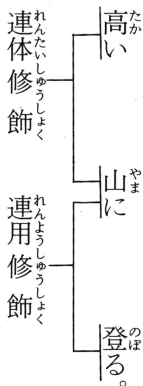
（注）

・連体修飾＝名詞（ものの名まえを表す言葉）にかかる（修飾する）

・連用修飾＝動詞（動作・存在・作用などを表す言葉）や形容詞・形容動詞（ものの性質や状態を表す言葉）にかかる（修飾する）

（例）

高い　山に　登る。

（高い→山に：連体修飾）（山に→登る。：連用修飾）

『高い』は『山』という名詞にかかるのでこの関係を連体修飾と言い、『山に』は『登る』という動詞にかかるので連用修飾という。

どり着いたことを思って、計り知れない感動が体のすみずみまで広がるのを覚えた。

あとは、キリルのどこかにある六つの島を捜し当てるのみだ。

「ねえ、早く帰って島探しをしない。」

思いはみんな同じだった。三人は、途中から驚きのあまり口がきけなくなったキーナじいさんに礼を言うと、エアースクーターに戻ってビルフォードの街へと突っ走った。

なって、扉は開かれ、汝は、大いなる力を得る』
「これだとキルノは薬じゃないみたい。」
「そうか『大いなる力』が薬のことかな。」
「ライル、きっとそうよ。石碑のほうも『六つの力が出会うと愛を救う』となってるし、若者がこの石板を頼りに得た薬で、恋人や人々を救ったんだから、『大いなる力』こそ薬と考えていいんじゃない。」
「そうだ。」とサトルも確信した。
「昔のキリル人にとって、いや、いまのキリルにとってもスード病の薬なら、ものすごく大きな力だよ。その薬のことが伝承として残されてきたのは、当然のことだったんだ。」
なぞは解け、スード・ウイルスに効く薬のある場所も、なんとか見当はついた。サトルは偶然に聞いたキーナじいさんの説教から、ここまでた

リタは小首をかしげながらも先へ進んだ。
「えーと、ここは『青い島では真珠。赤い島ではタパロの実』……この先で文字は消えているけど、これ……。」
「石碑の言葉と似ているっていうんだろう。」
サトルも同じ思いで言うと、リタがシャツの文字を広げて見比べた。
「色の順番が同じだわ。青、赤、茶……それに少し離れているけど、青の次に真珠、赤の次がタパロの実。」
「じゃ、石板の消えている部分も推測できるんじゃないか。」
ライルが言った。
「そうだよ、これ自体が暗号かもしれない。」
「ともかく石板の消えてる後を訳してみるわね。」
『六つのキルノを持って、ホープの中心へ行け。六つのキルノが一つと

神の国は希望の場所だからさ。」
　ライルも賛成した。
「リタ、次だ。」とライルがせかした。
「次は『島は大きな一つと、小さな五つからできている』と訳せるみたい。アーリー語で数字は一からワノ、ツノ、スノ、フォノ、ファノって数えるの。そして次は……。」とリタが少しずつ訳していった言葉をつなげると、それは次のようになった。
『島の色はそれぞれ異なり、それは青、赤、茶、緑、金、そして灰色』
『それぞれの島には、地下に大地がある。そこで、それぞれのキルノを手に入れよ』
「地下に大地があるってなにかしら、それにキルノもよくわからないわね、薬かしら」

き言ったことと同じなのよ。」
「どうじゃ、わしの言ったとおり神の国は六つの島じゃったろう。」
キーナじいさんは、いかにも得意満面という表情になった。サトルはほんの少しでも、キーナじいさんは知っててとぼけているのではないかと疑っていた自分を恥じた。このじいさんは伝承者で、内面は人の善いじいさんなのに、新しい地球移民に受け入れられなくなって世をすねたのかもしれない。
「ホーポって、アーリー語ではホープっていうんだけど、ホープのほうが響きがいいから、こっちを使うことにしない。」
リタが提案すると、
「そうだ、オレの先祖が使っていた英語でも、希望というのはホープだったはずだ。偶然かもしれないけどホープっていいね。オレたちにとっても

がすんなりいけば、アーリー語と似てるからなんとか訳せると思うの。」
そこがいよいよ核心だった。
「よし、早速やろうぜ。」
役に立つかどうかは別問題として、ライルもやる気になった。
石板の最初には
“HO⌂O ⊤O⊂U⅃O∩ O⌐∩⊤O”と刻まれていた。リタが読みながら言った。
「ホーポだか、ホポだかって、これ、歌のほうでは『希望』だけど、きっとつながりからみて神の国の名前だと思う。その次がシクノア　イラトでしょ。シクノは『六つ』というアーリー語と同じだから、シクノアとなると『六つの』で、イラトはアーリー語の『島』を意味するイランダに似ているから、『ホーポは六つの島だ』と訳せるみたい。おじいさんがさっ

それから『青い』や『森の』のような連体修飾のときには、〝[illegible]〟で終わっているわけ。そして『西へ』とか『愛を』とかの連用修飾の場合の語尾は、〝[illegible]〟になってるはずだわ。だからエストは『東』、ネストは『北』でそのままだけど、ウェストイは『西へ』とか『西に』になるはずよ。」

(この章の末尾の注を参照)

「たいしたもんだよリタ。」とライルが感嘆し、サトルも言った。

「神の言葉に文法があったなんて、いよいよこれは本物だぞ。そうすると、タパロってのがわからない。」

「アーリー語でもタパロだけれど、なんだかわからないのよ。ヌトがアーリー語で木の実のことだからタパロはたぶん木のようなものの名前でしょ。それより、石碑は、解読できたんだから、さっきの石板よ。文字の読み方

（カセットテープの歌詞カード参照）
「これで石碑の文字と私の知ってる歌が対照しているのよ。語順も合わせておいたわ。」
リタはそう言いながら、さらにシャツをやぶって石碑の文字を書き写していた。
サトルはその二つを見比べながら、なぞの文字が解明されてゆく興奮の中で、小さな疑問にいきあたっていた。
「リタ、同じように方角を示す言葉でも、エストとかネストっていうように〝〇〟で終わっているのと、ウェストイって〝[illegible]〟で終わっているものがあるけど、どうしてだろう。」
「それが神の言葉の文法なんだと思うわ。『月』や『真珠』などの名詞だとか、それが主語として使われているときは〝〇〟で終わっているでしょ。

祈りとよく似てるでしょう。」
「でも意味がわからない点では同じさ。」
「大丈夫よ。サマランジャは昔々という決まり文句だからともかく、フラーナ　ルーニーはね、『青い月』という意味なの。アーリー語でフラーナが『青い』だから、ブラナもたぶん同じ意味だと思うわ。」
「アーリー語って、どこの言葉なんだい。」
「私のパパの故郷で使われている言葉よ。」
サトルは地球地図のインド地方を思い浮かべた。古い文明の栄えたところと学んだ記憶があった。
「パパに教わったんだね。」
「そう。その歌詞もここに書いてみるわ。」
リタは余白の少なくなったライルのシャツにまた書き込んでいった。

「しかし、リタ。」とサトルはずっと抱いていた疑問を口にした。
「文字は読めるようになったものの、やはり意味がわからないのは同じじゃないのか。」
「それよ。」とリタは待っていたように答えた。
「さっき私、この歌を知ってると言ったでしょう。私の知ってる歌って、この祈りとメロディもほとんど同じで、言葉もね、ちょっと違うけど、とっても似てるのよ。びっくりしたわ。この祈りって、きっとなにかの歌かもしれないと思ったほどなの。」
そのリタの思いはやがて明確になるのだが、ともかくいまは意味の解明が先決だった。サトルはリタの言葉を待った。
「いい、私の知ってる歌、口ずさんでみるわね。『サマランジャ　フラーナ　ルーニ』これが出だしよ。『サマランジャ　ブラナ　ルノ』っていう

有無を言わせぬ口調に、ライルは白いシャツを着ていたのが不運だったと諦めたのか、炎天下でシャツを脱いだ。そのシャツの背中の部分にリタはペンを走らせる。

「五十音表に、とりあえずはじめの二行をあてはめてみるわね。」

キーナじいさんに祈りの言葉を唱えさせながら、〝┬⊃、└⊃、┐⊃〟と割り振っていく。

「ほら、この調子でやっていけば、五十音表は完成できるでしょ。」

（109ページ参照。読者のみなさん、空白の部分を自分で埋めてみてください）

やがて、表は完成した。

「これで神の文字は読めるわけじゃな。」

キーナじいさんにも結論はわかったようだった。

とリタは石碑の四行目の冒頭を指さした。

〝T∩◇∩ㄱO∩　⅃UTO……〟

「おじいさん、お祈りの中にタパロアって言葉がどこかにあるでしょ。」

とリタは言って、じいさんがうなずくのを見て続けた。

「ここがそうなの。単語のはじめのタ、パと最後のアがア段の音だから、ほら〝T∩、◇∩、∩〟って〝∩〟がついているでしょ。それにロはラ行の音で〝ㄱO〟だから、〝ㄱ〟が前についてるじゃない。」

リタはそこまで言うと三人のほうへ向き直って、スーパーペンを取り出して手にした。

「五十音表をつくって、この文字をあてはめていくと、もっとよくわかるわ。ライル、書くものがないからあなたのシャツ貸してよ、いいでしょ。」

頭の一部を指さした。
「いまのがこの一行なの。」
“⊤⊃⅃⊃⌐⊃⅃⊥Ⓒ⊃　◁⊂⌐⊃⅃⊃　⌐⊂⅃O”
「ここにね、ラという音が二つ出てくるでしょ。それが両方とも“⌐⊃”にあたってるわ。」
なるほど、とサトルはうなずいた。
「それから、ラ行の音でほかにルがあるじゃない。それが“⌐⊂”になってるから、ラ行の音には“⌐”がついていると思うのよ。」
サトルとライルも、リタの説明に引き込まれていった。キーナじいさんだけは、ちょっと不審そうに首をかしげている。
「次に冒頭のサ、マ、ラだけど、これは全部ア段の音よね。それが“⊤⊃、⅃⊃、⌐⊃”だから、“⊃”はア段の音につくのよ。ためしに……。」

「リタ、おまえ歌を知ってるって、この文字が読めるということなのか。」
キーナじいさんとライルが同時に言った。サトルも意外な展開に目を見張っていた。
「歌を知っていたから、たったいまこの神の文字が読めるようになったのよ。」
「どうしてなんだ。」
ライルがせき込みそうになって言った。
「おじいさん、ここに座ってもう一度、祈りの最初の部分をささげてみて。」
リタの言葉でキーナじいさんがひざまづき、二人もそこに並んで座った。
「サマランジャ　ブラナ　ルノ……。」
「そこまででいいわ。」とリタはキーナじいさんの祈りを制して石碑の冒

けで、意味と言われてもそれ以上は知らんな。」
「でもさっき、おじいさんは神の文字は誰も読めないって言ってたけど、おじいさん、いま読んでたじゃない。」
「なに、わしが神の文字を読んでいたじゃと。」
キーナじいさんの表情に驚きの色が走った。サトルとライルも身を乗り出した。唯一の手掛かりである神の文字を発見したものの、それを読める人がいないと知って落胆していたのに、いままた一筋の、それもかなり期待の持てる光がさそうとしているのである。
「おじいさん。」
リタはがくぜんとしているキーナじいさんに言った。
「いまの祈りの言葉は、この石碑に書いてあるわ。」
「じゃこの神の文字が祈りの言葉じゃというのか。本当か娘さん。」

の様子を不思議そうに眺めていたほどだった。

リタの視線が石碑の文字の下段までめぐって行ったとき、サトルは「リタ！」と小さく呼んでみた。

その声でリタが振り返った。彫りの深い顔が上気して、瞳は深い光を宿しているようだった。感動が全身にあふれているようにも見えた。

「いまの歌、私知っているの。」

リタの口もとに微笑みがこぼれていた。

「知ってるって？」

ライルの問いには答えず、リタはけげんそうな表情のキーナじいさんに言った。

「いまのお祈り、どんな意味かしら。」

「神をたたえる祈りじゃ。昔からこの碑の前で祈ることに決まっておるだ

第四章　神の文字

リタにとっては短く、サトルとライルにとっては長く感じられた時間が過ぎた。

実際は五分間ほどだったが、やがてキーナじいさんの祈りは、大きなせき払いを合図のようにして終わった。

しかしリタは身動きすらしなかった。頭の中でメロディを反復するかのように体を小刻みにゆすり、それでいて目は石碑から離れなかった。そしてその表情は真剣そのものである。

サトルとライルは顔を見合わせた。お互いの目は、リタがなにかをつかんだらしいと語り合っていた。祈りを終えたキーナじいさんまでが、リタ

第三章　キーナじいさん

サマランジア　ブラナ　ルノ

シオトイ　パロ　ルディア　スノ　リズ

バマランジア　アルバトア　ネスト

タパロア　ヌト　ブラウナ　ミロ

サマランジア　ベルダ　エスト

スト　シヤヌ　ゴルドア　クラド

バマランジア　イル　ウェストイ

ロコイ　セロ　ホポア　ウィゴ

シクノア　トラド　ガズル

シクノア　フォソ　アモイ　セイブ

『石碑の文字』（上段のホープ文字）と『キーナじいさんの歌』（下段のカタカナ）

・テープのＢＧＭ１に対応しています

面に刻まれていたのだった（次ページ参照）。
キーナじいさんは、その前にひれ伏し、そうして両手を上げ下げしながら、祈りの言葉を唱え始めた。それは意味不明ながら、なにか不思議なメロディをもった歌のように聞こえた。
「あれ？」
リタがふいにつぶやいた。
「どうしたんだ。」
ライルが心配そうに聞いた。
「しっ、ちょっと黙ってて。」
リタはライルを見向きもせずに言うと、そのメロディに魅了されたように小さくリズムをとりながら、目だけは石碑の文字を食い入るように見つめ出した。

リタも唯一の手掛かりを失いたくないのだろう。そのときは、三〇分後に自分がこの文字を読み取ることができることなど、思いもよらなかった。

「ともかく、この石板を借りていくしかないんじゃない。」

リタはそう言って、サトルとライルを目で促してキーナじいさんの後を追った。

「おじいさん、これお借りできますか。」

「ああ、もう少し待っておれ。神への祈りの時間じゃて、済んでからな。」

キーナじいさんは振り向きもせずに言うと、神殿の正面左手にある石碑の前にひざまずいた。高さ三メートル、幅二メートルほどの石碑は、茶褐色の一枚岩を削って造られたようで、これもかなり古いものとわかった。

そしてじいさんの背後に近づくと、そこにも同じような神の文字が、一

リタも念を押した。

「ああ、わしの祖父も読めんかったからの。」

キーナじいさんはそう言うと、もう話は終わったといわんばかりに立ち上がっていた。

リタは向き直ってサトルとライルに言った。

「残念だわ。でもこの石板がかなり古いものだってことは間違いないようよ。」

「もしかしたら、本当に一万年前のものかもしれないぜ。」

ライルがくやしそうに言う。思いは三人とも同じなのだ。サトルも心残りでつぶやいた。

「どこかに読める人はいないかなあ。」

「そうね、そういう人を捜すしかないわね。」

リタが落胆の声を上げた。サトルも期待が大きかっただけにがっくりとひざを落とした。

　石板はあっても、それが読めなければ無用の長物ではないか。さらに石板の文字も、薬のことが書いてあるかどうか怪しくなってしまう。

「でもね、おじいさん。」リタもそのあたりを感じ取ったらしく言った。

「読めないのに、どうして薬のことが書いてあるとわかるの。」

「それはじゃな、昔から言い伝えられておるからじゃ。」

　キーナじいさんは平然としていた。その言葉にうそはないように思えた。代々にわたって口で受け継がれたものを、じいさんもひたすら言葉でのみ街の人々に言い伝えていたのだろう。それとも、ぼけているのだろうか。

　サトルはふと疑問を感じた。

「本当に誰も読めないの。」

センチほどの黒い石の板を手に戻ってきた。
「娘さん、これじゃこれじゃ。」
キーナじいさんがリタに手渡したものを、サトルとライルが背後からのぞき込んだ。
そこには奇妙な文字が刻みこまれていた。中央の部分がすりへっているが、上と下は鮮明だった。しかし初めてみる文字である。サトルは胸が高鳴った。キーナじいさんがいまこれを読んでくれるのだろう。その思いはリタも同じらしかった。
「おじいさん、なんて書いてあるの、読んで。」
だが、じいさんの返事は簡単だった。
「いや、読めんのじゃ。神の文字を読める者は誰もおらぬのじゃよ。」
「えーっ、読めないのー。」

で言った。
「おい、なんだか本物らしくなってきたぜ。」
サトルもうなずいた。
キーナじいさんの話はまったく思いがけないものだったのだ。神の国の薬を示す石板が本当に存在するなら、伝説めいた話にも真実味が加わってくる。もしかしたら、スード病に効く薬が実在する可能性だってなくはないのである。
「でも、なんだか信じられない話ね。」
「しかし、本物だったらすごいことになる。」
「昔の若者みたいに、オレ達で薬を取りに行くことになるかもしれないものな。」
ライルとリタが話していると、キーナじいさんが縦二〇センチ、横三〇

んで行ったと伝えられておる。」

キーナじいさんはそこまで話したとき、ふとなにかを思い出したらしく、右のこぶしで左の手のひらをポンとたたいた。

「おお、忘れておったわ。神から翼のほかに、石板ももろうたんじゃった。」

「石板って、なにかしら。」

「薬のありかを書いた石の板じゃよ。娘さんはわしの話に興味があるんじゃな。それならどこかにあったはずじゃ、どれ、捜して見せてやろうとするか。」

「おじいさんありがとう。」

リタはうなずいてから明るい声で言った。

キーナじいさんが背を見せると、ライルが興奮をおさえかねたような声

しかしまた、キーナじいさんはギョロリと目をむいただけで返事はしなかった。
「神の国と薬について詳しく聞いてくれ。」とサトルは仕方なく、リタにささやいた。
リタがうなずく。自分の役どころを心得たらしい。
「おじいさん、神の国ってどこにあるの。」
「それじゃ。わしにもどこにあるかはわかっておらん。だがな、神の国は六つの島じゃといわれておる。中心の大きな島と、それをとりまく五つの島があるんじゃ。」
「そこに、石の悪魔にやられた人を治す薬があるというのね。」
「そうじゃとも。恋人を石にされた若者が取りに行ったんじゃ。その当時は、ファブにまだ神が住んでおられたから、若者は神から翼をもろうて飛

リタが説教はごめんとばかりに催促する。
「おお、そうじゃったな。大昔のキリルには天から火が降った年があったんじゃ。」
キーナじいさんは、やっと話し出した。そしてサトルが聞いた若者のことまでを、ひととおり話し終えた。すかさずリタが質問した。
「おじいさん、どうしてその話を知ってるの。」
「それはじゃな、ファブの神殿に昔から伝わるたくさんの話のひとつだからじゃ。」
「誰に教えてもらったの、おじいさん。」
「それは、わしの祖父からじゃ。ファブ神殿の神官をしておったわ。」
どうやら、キーナじいさんが神官の子孫といううわさは本当かもしれないとサトルは思って、「おじいさん。」とリタの後ろから呼びかけた。

を下ろした。ライルも真似て隣へ並ぶ。

「近ごろの奴らは、どいつもこいつも聞く耳を持たん。」

キーナじいさんがそう言うと、サトルはまた身をすくめた。地面を指したのに、勝手に石へ腰かけたことを言われたと思ったのだ。ライルも慌てて腰を浮かしている。しかしじいさんの言葉は、二人のことではなかった。

「せっかくわしが街まで説教に行っても、みんなわしを無視してしまう。そこへいくと娘さんはなかなか熱心そうじゃ。若いもんはこうでなくちゃいかんぞ。」

キーナじいさんは、前置きついでに説教まで始めるつもりらしい。流星群の日の夕方、サトルはそのキーナじいさんの説教に耳を傾けたのに、目に入らなかったのだろうか。

「おじいさん、肝心の天から火の降る年のことですけれど。」

「そうです。人を石に変える悪魔と神の国の話を、もっと詳しく知りたいんです。」

キーナじいさんはそう言ったサトルのほうに、再び鋭い目を向けた。サトルは思わず首をすくめ、ここはリタに任せたほうがよさそうだと思った。じいさんは再びリタに視線を移して言った。

「いいじゃろう。そこに座りなさい娘さん。あんたたち二人もその辺にな。」

キーナじいさんは、リタに座りやすそうな手頃な石を指し示すと、男二人にはつえで地面をたたいた。ライルがサトルの耳もとでささやいた。

「どうしてリタだけが特別で、オレたちはこうなんだ。」

「いいよ、ここはリタに任そう。黙って聞いていたほうがよさそうだ。」

サトルはこれも小声で答えて、リタの後ろにある大きめの石へ勝手に腰

「ふむ……。」
ちょっともったいぶった様子でヒゲに手を当ててじいさんは言った。
「話によってはじゃがのう。」
しかしその口もとはゆるんでいた。日頃は無視されているのに、丁寧に扱われて悪い気はしないのだろう。
「話ってね、おじいさん。」
今度はリタが言った。ライルがリタのひじを突つく。神の使者と言えという意味だろう。
だがじいさんは、今度は目もとに笑みをみせた。
「どんな話じゃ、娘さん。」
「はい、天から火の降る年のことです。」
リタの言葉をサトルが補足する。

さやいた。
「そういえばあのじいさん、神の使者と呼ばないと返事しないって、誰かが言ってたぜ。」
サトルはうなずいてから声を張り上げた。
「神の使者よ。」
キーナじいさんがゆっくりと振り向いた。白髪と白いヒゲが揺れ、じいさん特有のかおりも陽の中に漂った。
「なんじゃな、なにか用でもあるのか。」
長く伸びた白いまゆげに隠れそうなほど落ちくぼんだ眼が、ギョロリと光ったように見えた。
「キーナじいさん……いや神の使者よ、少しおうかがいしたいことがあるんです。ここでよろしいでしょうか。」

「おい、見ろ。じいさんだ。」
ライルが低い声で言った。ライルの指さす方をみると、東端の崖の上でじいさんは、朝日に向かってひれ伏し、両手を上げ下げしていた。
「朝のお祈りのようね。近くまで行って終わるまで待ちましょうよ。」
リタが唇に指をあてて言うと、また忍び足で歩み出した。そして三人が近づいたとき、祈りが終わったのかじいさんは立ち上がって腰を伸ばした。
その背へ向かってサトルは呼びかけてみた。
「キーナじいさん……おじいさん。」
サトルは最初はこわごわと、そして二度目は思い切って声を高めた。しかしじいさんは振り向きもしない。耳が遠いのか、それとも自分の名前さえ忘れてしまったのか。そのときライルが、サトルの脇腹を突っついてさ

サトルの声に、三人を乗せたエアスクーターは音もなく宙に浮くと、東の平野に向かって滑るように走りはじめた。
ライルの言ったように、一五分後にはファブの神殿に着いていた。
ちょっとした高台にあるその神殿は、神殿というにはあまりにもうらぶれた廃虚だ。崩れたり折れたりした柱が何本もある光景は、サトルがマイクロフィルムの百科辞典で見た光景に似ていた。それは地球の遺跡で、パルテノン神殿と説明があったのを覚えている。
西から来たサトルたちは、神殿の裏側に音もなく滑るように着いた。スクーターから降り、夏草の繁る神殿に足を踏み入れると、林立する石柱の右のはずれに、キーナじいさんの住居らしき石小屋が見えてきた。
「まだ寝ていると悪いから、東の正面のほうへ回ってみよう。」
サトルの言葉で、三人は足音を忍ばせながら石柱伝いに歩いていった。

第三章　キーナじいさん

翌朝、三人はまだ陽が昇らないうちにビルフォードの街を出た。
サトルの胃には、出がけにつまんだクラッカーとチーズが少し入っているだけだが、これからのことを考えると空腹感はなかった。
「こんなに朝早くて大丈夫かな。オレのエアスクーターなら数分だぜ。」
ライルが少し心配そうに、それでも自慢げに言った。
「平気、年寄りって朝は早いから。もっとスピード出したって大丈夫。」
リタは一晩寝たら落ち着いたのか、日頃の調子を取り戻していた。
「早く行って起きるのを待つほうが、留守に行って待つよりいいさ。とにかく出発だ。」

そう言ってサトルは自分の考えを述べた。
「なるほど、もしそれが予言というより言い伝えだとしたら、神の国に薬があるっていうのもデタラメじゃないかもしれないな。」
ライルが素早い反応を示して言った。
「とにかく人間が石みたいになるという恐ろしいことが現実に起こりつつあるんだ。キーナじいさんの話をもう一度詳しく聞いてみるだけの価値はあると思うよ。」
「そうね。たとえ数パーセントでも可能性があるのなら、やってみるべきだわね。」
リタも元気を取り戻しはじめていた。
「じゃあ、明朝にファブの神殿に行ってみようよ。朝早くなら、きっとじいさんもいると思う。思いたったら即実行さ。」

サトルの言葉にライルもうなずいていた。
「ごめんなさい。あなたたちを苦しめるだけなのに、私、話してしまって。」
「いいんだ、幼なじみじゃないか。将来も一緒に働くんだろう。それよりチャドラ先生も大変だ、先生がスード病だなんて。」
「でも、私にはパパを手伝えることがなにもないの。」
リタはサトルの慰めにまた悲しくなったのか、両手で顔を覆っていた。
サトルは、ふとキーナじいさんについて考えていたことを話してみる気になった。
「先生の手伝いになるかどうかは、まったく当てにはできないけれど、ちょっと手掛かりになりそうな話があるんだ。実はあの流星群を見た日に言ったキーナじいさんのことなんだけれど……。」

ないけれど。」

リタは涙声になっていた。その涙がほおを伝ってテーブルに落ちる。危機のときこそ落ち着くんだ、とサトルはその涙を見ながら自分に言いきかせていた。すると、なにかの本で読んだ言葉が思い出された。

『希望は光だ。つねに希望を失ってはならない』

サトルは気を取り直してリタに尋ねた。

「チャドラ先生は、リタがその書類を見たってこと知ってるの。」

「ううん。」とリタが涙をぬぐって答えた。

「パパが帰ってくる前に部屋を出て、コーヒーを入れ直してきたから知らないわ。」

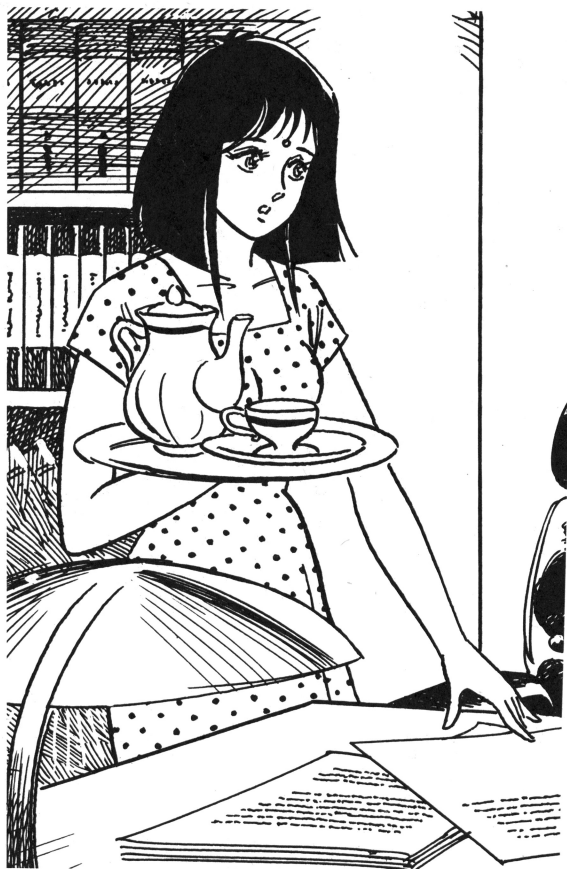
「じゃあ、ぼくたち以外は誰も知らないんだね。よし、この秘密は守ろう。世間に知れたら。それこそパニックだ。」

てはいけない、という機密書類だった。薬の効果はなくとも、患者に安心感を与えるために出し続けること、半年で角質化が全身に及ぶことが漏れたら、大パニックが起こるから、治療法の見つかる可能性が数パーセントでも残されているうちは、絶対に秘密は守るようにと政府が要請しているものだったのである。

「なんだって！」

サトルとライルが一緒に叫んだ。「治療法がない」、というリタの言葉がコダマのように響き続けていた。エミリアの、そして父や母の、さらにはライルの妹の全身がつめで覆われてしまった姿が脳裏に浮かんだ。それは打ち消しても打ち消しても浮かび上がってくる。

やがてリタが再び口を開いた。

「私のパパも……本当はスード病にかかっているの。背中だから誰も知ら

ライルがおどけた調子で言ったが、リタの表情は真剣そのものだった。
「私ね、コーヒーをいれてパパの書斎へ持って行ったのよ。そのときちょうどパパはトイレへ行っていなかった。だから私、待っていて机の上の書類を見てしまったの。」
「そりゃ、盗み見しちゃいかんな。」
ライルがちゃちゃをいれた。いつもなら負けじとすぐ切り返すリタを期待したのだろうが、今日のリタは素直だった。
「ええ、いけなかったのよ。その書類、キリルの政府筋から出ているものだったの。そしてそこに書かれていたのは……。」
とリタはそこで言葉を切り、ソーダ水をごくりと飲んで続けたのだが、それは次のような重大なことであった。
リタが読んだ書類は、スード病の治療方法がないことを絶対に漏らし

リタは二人を居間に通した。明るくて広い部屋は、木の家具で統一してあって落ち着いた雰囲気だったが、リタの言い出したことは落ち着いて聞いていられるものではなかった。

それでも最初、リタは冷静だった。家の人は留守らしく、リタは自分でうんと冷えたソーダ水のコップを、強化ガラスのはめこまれたテーブルに並べた。だが、二人に向かってテーブルに着いたリタは、しばらく黙っていてから、ふいに涙ぐんだのだ。

「ごめんなさい……でも私、恐いの。」

声も心なしか震えを帯ていた。気の強いリタが、とサトルは身構える。

「私ね、昨夜恐ろしいものを見てしまったの。あなたたち以外に言えることじゃないのよ。」

「どうしたんだ、リタらしくないぜ。」

代々にわたって語り聞かされてきたのかもしれない。
あの時じいさんは、神の国に薬があって、恋人を石にされた若者が取りに行ったとも言った。サトルは自分がその若者になり、エミリアを助ける場面を空想してから、慌てて首を振ってそれを打ち消した。エミリアの全身が石になってしまうなんて、考えただけでも耐えられないことだった。

一週間が過ぎた。
宇宙港の閉鎖は続いていたし、エミリアの、そして両親の不気味な角質部分は、かなり広がってきている。ライルの妹も肩に症状が現れたと聞いた。みんな医大の塗り薬をつけているが、効いているのかさえ怪しい。
夏休みに入った日、サトルはリタから電話で呼び出された。至急の話があるから来てほしいということだった。ライルにも連絡したという。
サトルはすぐライルを誘って駆けつけた。

のメドについても、発表はひと言もふれてはいなかったのである。
そのニュースを知ったとき、サトルの頭にひらめいたのは、不吉な予感とキーナじいさんの言葉だった。

――天から火の降る年には……
　石の国の悪魔が永い眠りから目を覚ます。――

しゃがれ声がよみがえっていた。いまその言葉を思い起こしてみると、なんだか状況が似ていなくはなかった。
天から降る火であるスード流星群が、人の皮膚を硬くする石の悪魔を、一万年という永い時を超えてキリルにもたらした。
スード・ウイルスが石の悪魔だったとしたら、とサトルは考えてがくぜんとした。キーナじいさんは現状を予言したことになるのだ。あるいは予言でなくても、そのときにもあった同じ病気の流行を、じいさんは

「それは手回しがよかった。じゃ私はすぐ政府首脳に会ってくる。奇病の緊急対策予算も捻出してもらうよう頼んでおこう。ともかくできる限りの研究は続けてくれ。」

学長はそう言い残すと、太り気味の体にもかかわらず素早く身をひるがえしていた。

翌日、朝のニュースは宇宙港の閉鎖を報じていた。そしてそれに伴って、医大からは病気に関する発表があった。奇病はスード病と命名され、原因はスード流星群のもたらしたウイルスであるとのみ報じていた。空港の閉鎖も、病気の流行がおさまるまでの一時的処置ということであった。

もちろん、スード病がやがて全身に広がってしまう恐怖や、その治療法が見当たらない不安については伏せられていた。だから宇宙港の再開

に角質化は進むと思います。皮膚がつめのようになるわけですから、しばらくは生命も維持できるでしょうけれど、それも時間の問題です。」
「ウイルスが大気中に散ったにしては、症状の出ない人がいるのが変だな。」
「それが不思議といえば不思議な点です。現在のところ、キリルの全人口の三分の二は難を免れていると思いますが、といってその理由はさっぱりわかりません……。」
「よし、いずれにせよ政府に言って宇宙港を閉鎖してもらおう。こんな厄介なウイルスを地球にまで持ち込んだら大変だ。」
「その点でしたら、一応の手は打ってあります。昨日の段階で宇宙港に連絡しました。流星の夜よりもあとに出発した船で、地球に着陸したものはまだないそうです。」

わりません。」
チャドラ助教授は両手で頭を抱え、近くのソファに身を沈めた。
「流星が大気摩擦で溶けたときに、かなりの量のウイルスが大気中にまき散らされた。それが症状の流行につながったわけだな。」
学長もそう言ってソファに腰を落とした。
「何しろ耐熱実験では、二三一六度までやってみても死ななかったやつなんですよ。効く薬がないんです。手術ではぎ取るにも、ずいぶんと奥深く角質化が進んでいますし、まず再発を防ぐことも難しいでしょう……。」
「症状の進行状況はどうなんだね。」
チャドラ助教授の悲壮な声に口をはさんだのは付属病院の院長だった。
「はい、私の診ている患者に関する限りですけど、少なくとも半年で全身

ていた。白いテーブルに真珠をばらまいたような映像である。
「左が患者の皮膚から採取したもので、右がスードいん石の断面からみつけたものです。」
説明しているのはチャドラ助教授だ。浅い褐色の顔。秀でた額と高い鼻が彫りの深さを際立たせ、やせた体とあいまって精かんな感じを与えている。面影はリタに似ているものの、その表情には明らかに疲れがあった。
「同じウイルスだね、チャドラ君。やはり君の説どおり原因はスード流星群だったのか。」
白髪まじりのでっぷりした医師が、鋭い眼光で画面を見ながら言った。
ビルフォード医大の学長である。
「そうです。でも原因はわかっても、手の打ちようがない点ではなんら変

「なんだか気味が悪いわね。」
母が美しいまゆを曇らせていた。
「でも生命に別状はないと言っているんだろう、そのうちきっと治るさ。」
父が気軽に言った。サトルは、あの夜の不吉な予感を思い出したが、登校の時間が迫っていたこともあって、玄関を飛び出したときにはもう忘れてしまっていた。
だが、その日の午後、サトルたちが知らないところで、緊急な事態が迫っていることが話し合われていたのである。
そこはビルフォード医大の学長室だった。数人の医師が深刻な面持ちで、壁にはめこまれたディスプレイに見入っていた。
縦に一本の線で区切られた画面には、右にも左にも同じような形が映っ

のを、おそるおそるなでていた。
「チャドラ先生は、なんて言ってるの。」
サトルは思わず聞いていた。チャドラ先生とはビルフォード医大の皮膚科の助教授で、リタの父親でもあった。
「昨日の診察では、皮膚がつめと同じように角質化しつつあると言っていた。先生にも初めてのケースらしい。ここ数日で同じような症状の人がずいぶんふえているというが、とりあえず様子をみるしかないだろうって。」
父の説明が終わるのを待って母が言った。
「サトルは別に異常ないんでしょうね。」
「うん、ぼくはない。でもエミリアが首のところにできてるし、クラスにも一〇人ほどいるんだ。顔にできてるのもいるよ。」

第二章　奇病の流行

「やっぱり昨日より大きくなっている。」
「私のもそうよ、おかしな症状ね。」
流星群をみた日から四日後の朝の食卓だった。サトルの父と母が話していた。
食卓にはトースト、ハムエッグ、ミルクとサラダが並べられていて、どれもがキリル人の農場から直接買った新鮮なものばかりだった。とくに野菜は、地球よりはるかにおいしいと言われていた。
だが、そのみずみずしいサラダとは似合わない会話だった。父は、左手の甲にできたコインほどの硬いかたまりをなで、母も足首にできた同じも

実際、それは見事な天体ショーといえた。三人はただぼうぜんと見とれていたが、サトルはふと、美しすぎるものには毒がある、と不吉な予感におののいて、慌てて思いを散らすように立ち上がったのだった。

エミリアと一緒にどこへ行こうか、とサトルは考えていた。海か山か、それともジェットホッケーでも観に行くとするか。

そのとき、それまで少しだった光の雨が、急に輝きを増して空一面に流れ出した。まっ黒のスクリーンに、光の矢が美しい直線と曲線を描いて降り、それはつぎつぎにあふれるように現れては消えるのである。

「わあすごい。」とリタが、ひときわ長い尾を引いて流れた星を見て歓声を上げた。

「ねえ、いまの見た、見たでしょう。」

「見たよ、あれだけ大きかったら、燃え尽きずに地上まで落ちたかもしれないぜ。」

ライルが答えていた。丘の斜面からもどよめきが風に乗って伝わってくる。

ツが得意だった。栗色の少し内側へカールした髪が、活発に動く深い緑色の瞳によく似合って、サトルはエミリアがこの春に地球から移民してきたとき以来というもの、次第にあふれる思いに耐えきれなくなっていった。だから無口で恥ずかしがり屋のサトルでも、意を決して思いを打ち明けられたのである。エミリアも思いは同じだった。

　サトルにガールフレンドができたと知ったとき、ライルもリタも信じられぬ思いで話し合った。サトルは女の子から話しかけられても、なにを話していいかわからないほど内気なので、自分から声をかけることなど、考えられないことだったのだ。

　なにか大変なことでも起こるのではないかと、ライルとリタはささやきあったものだが、その二人の交際も、すでに三ヵ月を経てもうすぐ夏休みに入る。

「やっぱり、いつもの結論じゃない。」
リタが突き放すように言い切った。
「いや、今日のはもう少し先があった。その神の国には、石になった人を元に戻す薬があるんだって。昔キリルが悪魔に襲われたとき、恋人を石にされた若者が、その薬を捜しに神の国へ行ったとかいう話らしかった。」
「ふーん、おじいさんの話にしちゃ、なかなかロマンティックな展開ね。」
リタはもうその話題には興味をなくしたらしく、そう言うとライルのほうを向いて、なにやら話しはじめてしまった。
サトルの思いも、やがてキーナじいさんから離れていき、恋人と言ったことから、ガールフレンドのエミリアのことを思い出していた。今夜も誘ったのだが、エミリアの家庭は厳しくて、夜の外出は禁止なのである。
エミリアはサトルより一つ年下で、小柄だがサトルと同じようにスポー

のことかしら。」
「もしかしたら、流星のことかなあ。」
ライルが興味深そうに沈黙を破った。黙っていられない性分である。
「ぼくもそう感じたんで、しばらく聞いていたんだけどね。」
「で、おじいさんはそのあと、なんて言ったの。」
「石の国の悪魔が永い眠りから目を覚ますって。」
「なによそれ、石の国の悪魔って。」
「わからない。人を石に変えるというようなことをつぶやいていた。」
「へえ、恐いのね。」
リタはバカにした口調だったが、ライルは興味深そうに「それで?」と
サトルを促した。
「神に祈れってさ。」

のことを言っているのではないか。だから少しだけ耳を傾け、さらに時間に遅れることになったのだ。

「天から火の降る年には……。」

北の空に少しずつ流れ出した光をみて、サトルは思わずつぶやいていた。

「なあに、それ。」

耳ざとく聞きとったリタが尋ねた。

「いや、別になんでもないんだ。」

「なによ、そっけないんだから。天から火の降る年って、なんのこと。」

そこまで言われると、無口で面倒くさがり屋のサトルとしても答えざるを得ない。

「キーナじいさんが言ってたんだ。」

「へえ、あのおじいさんの話なの。よく聞く気になったわね。でも、なん

んでいたが、かつてその神殿を守っていた神官の子孫ともいわれているように、時折り街までやってきては、ひとしきり辻説法をしてゆくのだった。身なりも異様だったが、その説教の内容も異様だった。サトルも何度かそれを聞いたことはあったが、「夕陽の森に赤の種を植えると、希望の朝には力の実がなる。」などと言われても、なんのことかわからなかった。だから昔はいざ知らず、キリル暦になってからは誰も相手にする人はいなくなった。それでもじいさんは街へやってきて、なにかをつぶやいて去ってゆくのである。

そうして今日もキーナじいさんはやってきていた。サトルは家を出たところで出くわしたのだった。キーナじいさんは言っていた。

「天から火の降る年には……石の国の悪魔が永い眠りから目を覚ます。」

もしかしたらそれは、とサトルはぎくっと立ち止まって思った。流星

ルもライルをまねて草を背に寝転んだ。
斜面を渡ってくる風には、潮の香りと草木のにおいが混じって、その風がリタの長い髪を揺らし、そうしてなにかを運んできていた。
そのなにかとは、サトルがさっきから気になって思い出せないでいたものだった。それがキーナじいさんのことだとわかったのは、リタの髪だったか、それを揺らせた風が運んできたにおいのせいだったろうか。
そのキーナじいさんと呼ばれるキリル人は、黒いボロ布を体に巻きつけ、ボサボサの白髪とこれまたまっ白なヒゲに埋もれたしわだらけの顔をした老人だった。体からはかすかに潮と草木の香りが漂っていたし、歩くと白髪と白いヒゲが揺れたから思い出したのかもしれない。
ビルフォードの街から東に数十キロ離れたところに、ファブの神殿という古い遺跡があって、キーナじいさんは自ら神の使いと名乗ってそこに住

顔の面積のわりに目鼻や口が小づくりなライルの童顔からは、天才的とされる機械いじりの腕は想像がつかない。エアスクーターをチューンナップして、最高スピードで二〇パーセント以上も引きあげ、時速二五〇キロまで出せるようにしたのは、つい先日のことだった。

しかしライルの運動神経では、そのスピードについていけないから、それはあくまで可能性だけに終わっていた。

それをリタに指摘されたときも、ライルはふくれっ面をしていたが、今度もまたパンダがすねたようにしている。その感じがおかしいのか、リタがライルの顔をのぞきこんでクスッと笑った。それでライルはさらに不機嫌になって、鳥の巣のようなモジャモジャ髪の後ろへ両手を組んで、顔を背けながら巨体をどさっと草の上へ投げ出してしまった。

会話が途切れると、その音が響いただけであたりは静かになった。サト

「一五分の遅刻よ。」とリタが時計に目を走らせて言った。
「でも遅刻常習犯のサトルにしちゃ上出来のほうだわ。」
口の悪さだけは昼間とちっとも変わらない。
「よく言うぜ、自分だってついさっきだろ。」
ライルがリタの向こうから口を挟んだ。体と同じように声も太い。
「私は宿題を片付けてきたのよ、ちゃんと。」
澄まし顔でリタが言うと、ライルも負けてはいない。
「ふん、つまらんことだけまじめな人だ。」
「へえー、明日の地球史のノート、どうなってもいいわけ？」
リタとライルは同じクラスである。だから歴史に弱いライルにとって、それが得意なリタのノートは大きな武器だった。あっさり一本取られたライルは、ちょっぴりほおをふくらませて黙るしかない。

サトルの足がはねるに従って、次第に人込みは薄れ、頂上付近では人影もまばらになった。サトルが肩で息をするほどだから、さすがに頂上まで登ってくる人は少ないのだろう。

その頂上の眺めのいい場所に、二人は背を見せて座っていた。ライルの背中が大きい。一八〇センチ、八五キロ。だから並んでいるリタがほっそりみえる。

近づくとリタの横顔が、宇宙港の淡い光に浮かんでいた。地球ならインド系の混血と呼ばれるリタの顔は彫りが深い。すっきりと大きな瞳、そうしてそれをやわらかく支える丸みを帯びたあごの線。淡い光のせいもあってか、リタは昼間の彼女と違って、いい雰囲気を漂わせる美人だった。

「やあ、遅くなってごめん。」

サトルはそう言って二人に並んで座った。

ル」という名前は、その国特有の名前なのだ。
ライルならいいが、遅れたら口の悪いリタにまた何をいわれるか。そう思うと、さらにサトルの足は斜面ではねた。
ライルとリタはサトルの幼なじみであり、ビルフォード・パブリックスクール高等部の同級生であった。将来の目標も同じなだけに仲もいい。三人ともハイスクールを修了したら、航空宇宙大学へ進学して、やがては宇宙船に乗って働こうと決めていた。
サトルの希望はパイロットコース。
機械いじりの好きなライルは機関コース。
そして女の子のリタは、宇宙生化学のコースへ進みたいと思っていた。
もちろん三人にとって、今夜の流星群は見逃せないもののひとつだった。だから丘の頂上で待ち合わせたのだが、もうその時間は過ぎていた。

てくれた。そうして二五年がたったいま、この星には地球人とキリル人がほぼ同じ数で仲良く暮らしている。
そのキリルで、地球では絶対に見られないスード流星群の光の雨が見られるのだ。しかも百年に一度などという出会いではないのである。人々が興奮して集まってきても無理はなかった。
そのふもとの人込みをぬって、サトルは足を速めていた。スポーツで鍛え抜かれた長い脚が、まるでバネのように地を蹴る。耳まで伸びた黒い髪が揺れる。
あたかも宇宙の広がりを思わせるような黒い瞳と黒い髪は、サトルが地球の、それも東洋人と呼ばれていた種族の血をひいていることを示している。つねに神秘的な場所として語られている東洋の端に、小さな島国がある。それが地球に宇宙世紀をもたらした「ニッポン」であり、「サト

れから見ようというのである。
一万年に一度という、気の遠くなるような長い旅をしている、なぞを秘めた流星群だったから、それを見られるのは珍しいというより、たかだか百年単位の生を受けた地球人にとっては、むしろ奇跡というほうがいいのかもしれない。
ワープ航法を完成させた地球人が、キリル星を発見したのが二五年前の二四七一年。その後の調査で、大気や地形を始め、すべてがキリル星は地球とそっくりなことが確認された。スペースコロニーでも人口爆発をおさえきれなくなった地球人が、この星を格好の移民地と考えて当然であった。
ちょっと見ただけでは、地球人と区別がつかない温厚なキリル人たちも、未知の文明をもたらした新しい住民を、なんの抵抗もなく迎え入れ

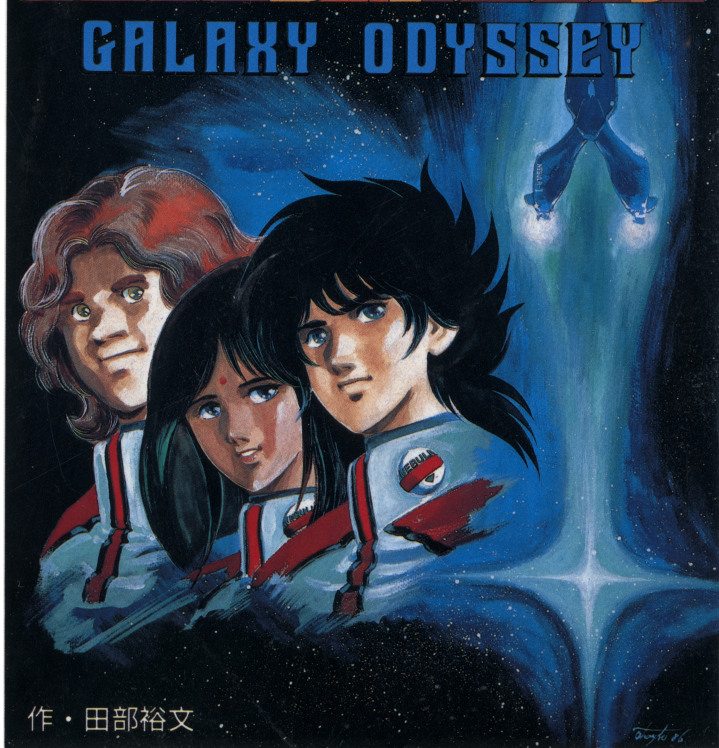
第一章　スード流星群

キリル暦二三年七月初旬、星の美しい夜だった。ビルフォードの街を北に見下ろす小高い斜面には、夜を待って多くの人々が集まってきていた。その人々を、東に広がる宇宙港の照明がほのかに照らし出している。

草むらに座りこんだ人、立木にもたれて腕を組む人、あるいは草を枕に寝ころぶ人など、人それぞれの姿で私語を交わしたり、思いにふけったりしていたが、誰もが同じなのは、眼を北の空に向けていたことだった。

街の灯はそのはるか下だ。

人々が待っているのは、その夜、キリルの夜空で繰り広げられる、珍しい天体ショーだった。スードと呼ばれる流星群が降らせる光の雨を、こ

銀河伝承

銀河伝承

WAVE JACK

銀河伝承

イマジニア株式会社